

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『大職冠』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 太田, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000664

國學院大學図書館所蔵『大織冠』の解題と翻刻

針本 正行
太田 敦子

はじめに

國學院大學図書館には、冊子本の体裁をとる『大織冠』として、江戸時代に制作された一冊本（國本1）と二冊本（國本2）、室町時代に制作されたと思量される『たいしよくわん』一冊本（國本3）が収蔵されている。⁽²⁾すでに、『大織冠』絵巻・絵草紙の成立、諸本及び挿絵の問題については、恋田知子氏によって、薄雲御所慈受院所蔵『大織冠絵巻』（慈受院）を対象として具体的に指摘されている。⁽³⁾

そこで、本稿では、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本1）の全文翻刻及び挿絵の構図の分析をふまえて、國本1と、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本2）、『たいしよくわん』（國本3）、薄雲御所慈受院門跡所蔵『大織冠絵巻』（慈受院）、大頭左兵衛本『大織冠』⁽⁴⁾（大頭本）、寛永整版本『大織冠』（整版本）⁽⁵⁾の本文との校合、國學院大學図書館に所蔵されている『大織冠』三点の挿絵の構図の比較、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本1）の制作

時期などの問題についての検証を通して、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本1）の特徴を明らかにしたい。また、享受の問題として、『大織冠』における神功皇后譚についても述べてみたい。

なお、『大織冠』（國本1）の翻刻にあたっては太田敦子氏の協力を得た。

【書誌】

全一冊。元來三冊であったものを一冊に仕立て直している。表紙は布地縹色地金糸繫文様（改装）、料紙は鳥の子、寸法は、縦二九・四糎、横二二・八糎。一面十行書。挿絵は一八図。（貴三三四八）

一、『大織冠』（國本1）の本文

（一）『大織冠』の冒頭本文

本節では、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本1）の本文と、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本2）、『たしよくわん』（國本3）、薄雲御所慈受院門跡所蔵『大織冠繪卷』（慈受院）、大頭左兵衛本『大織冠』（大頭本）、寛永整版本『大織冠』（整版本）の本文とを校合する。冒頭本文を校合すると次のようになる。

- ①
- 國本1 それ我・てう・と申は・あまつこやねのみことあまのいはとををしひらきてる日のひかりもるともにかすかのみや
- 國本2 それわかつてう・と申は・あまつこやねのみことあまのいは戸ををしひらきてる日のひかりもるともにかすかのみや
- 國本3 それわかちようと申は・あまつこやねのみことあまのいはとををしひらきてる日のひかりもるともにかすかのみや
- 慈受院 それわかつてう・と申は・あまつこやねのみことあまのいは戸ををしひらきてる日のひかりもるともにかすかのみや

大頭本 夫・我・朝・・・と申は・あまつこやねのみことのあまの岩・戸をしひらきてる日の光・・・もろともに春・日の宮・
 整版本 それ我朝わがてう・・・と申すは天津あまつ・こやねのみことの・あまの岩いは・戸とをしひらきてる日の光ひか・りもろともに春かす・日がの宮みや・

②

國本1 とあらはれて國家こつか・をまほり給ふなりされはにやかすかを春・の日とかく事・は夏・の日はこくねつす秋の日はみしかく
 國本2 とあらはれて國家・をまほり給ふなりされはにやかすかを春・の日とかくことはなつの日はこくねつす秋の日はみしかく
 國本3 とあらわれて國下・をまほり給ふ也・されはにやかすかを春・の日とかくことはなつの日はこくねつす秋の日はみしかく
 慈受院 とあらはれてこつかをまほり給ふなりされはにやかすかを春・の日とかくことはなつの日はこくねつす秋の日はみしかく
 大頭本 とあらはれて國家・を守り給ふ也・されはにや春・日をはる・日と書・事・は夏・の日はこくねつす秋の日はみちかし
 整版本 とあらはれて國家こつか・をまほり給ふなりさればにやかすがを春はる・の日と書かく・事・は夏なつ・の日はこくねつす秋あきの日はみじかく

③

國本1 冬・の日はさむけし春の日はのとかにしてよくはんふつをしやうちやうす四季きにことさらすくれ・・・めいしつなるに
 國本2 ふゆの日はさむけし春の日はのとけし・・・よくはんふつをしやうちやうす四季きにことさらすくれ・・・めいしつなるに
 國本3 冬・の日はさむけし春の日はのとけし・・・よくはんふつをしやうちやうす四季きにことさらすくれ・・・めいしつなるに
 慈受院 冬・の日はさむけし春の日はのとけくし・・・よくはむふつをしやうちやうす四季きにことさらすくれたりめいしつなるに
 大頭本 冬・の日はさむけし春の日はのとけくし・・・よつく万ふつをしやうくす四季きに殊・更・すくれ・・・名日・なるに
 整版本 冬ふゆ・の日はさむけし春の日はのどかにして能・ばんぶつをしやうちやうす四季きに殊更しとく・・・すぐれて・めいじつなるに

④

國本1 よりつ、春・の日とかき・・・奉て・・・春・日と名付・申・なりかのみやのうち子は藤原氏ふぢはら・・・にておはしますふちはらの其・

國本2 よりつ、春・の日とかきたてまつりてかすかとなつけ申・なりかのみやのうちこはふちはらうちにておはしますふちはらのその
 國本3 よりつ、春・の日とかきたて奉て・かすかと名付・申也・・かの宮・のうちこはふちはらうちにておはしますふち原・の其・
 慈受院 よりつ、はるの日と書きたてまつり・かすかとなつて申すなりかのみやのうちこはふちはらうちにておはしますふちはらのその
 大頭本 よりつ、春・の日とかき奉て・・春・日と名付・申也・・かの宮・の氏・子は藤・原・氏・にておはします藤・原・の其・
 整版本 よりつ、春・の日とかき奉て・・・春・日と名付・申なり・彼・みやのうち子こは藤原氏ふじはらうぢ・・にておはしますふちはらの其・

⑤

國本1 中・にたいしよくわんと申は・かまたりのしんの御事・なり

國本2 中・にたいしよくはんと申は・かまたりのしんの御ことなり

國本3 中・に大・しよくわんと申は・かまたりのしんの御事・也・

慈受院 なかにたいしよくわんと申すはかまたりのしんの御ことなり

大頭本 中・にたいしよ・官・と申・はかまたりの臣・の御事・也・

整版本 中・にたいしよくわんと申すはかまたりのしんの御事・なり

(二)『大織冠』の末尾本文

次に、末尾における國學院大學図書館所蔵『大織冠』(國本1)の本文と、國學院大學図書館所蔵『大織冠』(國本2)、
 『たいしよくわん』(國本3)、薄雲御所慈受院門跡所蔵『大織冠絵巻』(慈受院)、大頭左兵衛本『大織冠』(大頭本)、
 寛永整版本『大織冠』(整版本)の本文とを校合する。

①

國本1 あまはむなしく成・たれと・かしこきせんけう・はうへんにより・りうくうかいへむはわれしむけほうしゆをことゆへなく

國本2 あまはむなしくなりたれと・かしこきせんけう・はうへんにより・りうくうかいへむはわれしむけほうしゆをことゆへなく

國本3 あまはむなしく成・たれと・かしこきせんきようはうへんによつてりうくうかいへうはわれしむけほうしゆをことゆへなく

慈受院 あまはむなしくなりたれともかしこきせんけう・はうへんによつてりうくうかいへうはわれしむけほうしゆをことゆへなく

慈受院 あまはむなしくなりたれともかしこきせんけう・はうへんによつてりうくうかいへうはわれしむけほうしゆをことゆへなく

大頭本 あまはむなしくなりたれと・かしこきせむけう・はうへんによつて龍宮界へ・・・うははれしむけほうしゆを事・ゆへなく

整版本 あまはむなしく成・たれどかしこき・ぜんげう・はうべんにより・竜宮かいへ・・・むばわれしむけほうしゆをことゆへなく

② 國本1 むはい返・し給ふ・事・ありかたしとも中・くんに申をよはざりけりこのたま・すなはちをくりふみにまかせ・こうふくしの

國本2 うはい返・し給ふ・ことありかたしともなかく・申をよはざりけりこのたまはすなはちをくりふみにまかせ・こうふくしの

國本3 うはいかへし給ふ・ことありかたしともなかく・申におよはざりけりこのたまはすなわちおくりふみにまかせ・こうふくしの

慈受院 うはいかへしたまふ事・ありかたしともなかく・申におよはざりけりこのたまはすなわちおくりふみにまかせてこうふくしの

大頭本 うはい返し・給ふ・事・有・かたしとも中・くんに申をよはざりけり此たまは・すなはちおくり文・に任・せ・興福寺・・・の

整版本 むばい返し・給ふ・事・ありがたしともなかく・に申をよはざりけりこのたまはすなはちをくりふみにまかせ・こうぶくじの

③ 國本1 ほんそんしやかほとけのみけんにえりはめ給・ひけるとかやしやうしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸・のしやか

國本2 ほんそんしやかほとけのみけんにえりはめ給・ひけるとかやしやうしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸・のしやか

國本3 ほんそんしやかほとけのみけんにえりはめたまいけるとかやしやうしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸のしやか

慈受院 ほんそんしやかほとけのみけんにえりはめたまひけるとかやしやうしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸・のしやか

慈受院 ほんそんしやかほとけのみけんにえりはめたまひけるとかやしやうしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸・のしやか

大頭本 本尊しやか佛の……みけむにゑりはめ給ひけるとかや正心のれいさうしやくせむたんの……みそぎにて・五寸・のしやか
 整版本 ほんぞん釈迦じゆかほとけの・みけんにえりはめ給ひけるとかやしやうじんのれいさうしやくせむだんのみそぎにて・五寸・の釈・迦

④

國本 1 をつくり・・にくしきの御しやりを御しんにつくりこめながら方・八寸・のすいしやうのたうの中・におさめ・むけほうしゆ

國本 2 をつくり・・にくしきの御しやりを御しんにつくりこめながら方・八寸・のすいしやうのたうのなかにおさめ・むけほうしゆ

國本 3 をつくり・・にくしきの御しやか・こしんにつくりこめながらはう八寸のすいしやうのたうのなかにおさめ・むけほうしゆ

慈受院 をつくりたてにくしきの御しやりを御しんにつくりこめながらはう八寸のすいしやうのたふのなかにおさめてむけほうしゆ

大頭本 を作・り・・にくしきの御しやり・こしむに作・り籠ながらほう八寸・のすいしやうの塔・の中・におさめ・むけほうしゆ

整版本 を作・り・・にくしきの御しやりを御身に・作・り籠めながらほう八寸・のすいしやうのたうのなかにおさめ・むげほうしゆ

⑤

國本 1 と名付け・三國・一のてうほうりうわうのをしみ給ひ・し・ことはりとこそ聞・えけれ

國本 2 と名つけて三國・一のてうほうりうわうのをしみ給ひ・し・ことはりとこそきこえけれ

國本 3 と名つけて三こく一のてうほうりうわうのをしみたまひし・事・はりとこそきこえけれ

慈受院 と名つけて三こく一のてうほうりうくうのおしみたまひしもことわりとこそきこえけれ

大頭本 と名付け・三國・一の重・寶・龍・王・のをしみ給ひ・し・理・・とこそ聞・えけれ

整版本 と名づけ・三國・一のてうほうりうわうのをしみ給ひ・し・ことはりとこそ聞・えけれ

六点の『大織冠』の冒頭と末尾の本文の校合をふまえると、國學院大學図書館に所蔵されている三点の『大織冠』の本文は、大頭本系統であるといえる。

(三) 『大織冠』の本文異同1

本節では、國本1の29丁オ・ウの「すいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなけすて、てあつとはかり申」以下の部分における本文異同について指摘したい。

國本1すいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなけすて、てあつとはかり申万子此よしみるよりもいかやうにも御身てんまはしゆんのけ、んにてしやうけをなさむそのためなあやしやいかにといひけれと何と物をはいはすして只なみたくみたるはかりなりまんこかさねていひけるそいや何とたるませ給ふともせひにつけておほつかなした、かいていにしつめみくつになせといさみをなせはあらけなきつはもの御てにすかりうみへいれむとすりう女はいと、あこかれてあらうらめしの人のことはや野にふし山を家とするこらうやかんのたくひたにもなさはは有こそきけみつからと申はけいたんこくの大わうのいつきのひめにてさふらふなるかあるきさきのさんによりうつほふねにつくりこめさうは万里へなかさるゝたま／＼きとくふしきにしんりんにあひたればさりともとこそおもひしになにのつみにうきかいていにしつむへきそうらめしさよとかきくとくみたれかみをつたひ涙のつゆのこほるゝはつらぬくたまのことくなりしもをおひたるをみなへし下葉しほるゝふせいしせいしかやさうにすてられてひしきものにはそてしぬれほす日もなしろわひけるも今こそおもひしられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちひるもゝのこひにそあひきやうなみと涙にうちぬれものおもふ人のふせぬるかやうちむつけたる

國本2すいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなけすて、あつとはかり申まんこ此よしみるよりもいかさまにも御身はてんまはしゆんのけけんにてしやうけをなさんそのためなあやしやいかにといひけれとなにものをはいはすしてたゝなみたくみたるはかりなりまんこかさねていひけるはいやなにとたるませたまふともせひにつ

けておほつかなした、た、かいていにしつめくつになせといさみをなせはあらけなきつはもの御てにすかりうみへいれんとすりうによはいと、あこかれてあらうらめしの人のことはや野にふしやまをいゑとするこらうやかんのたくひたにもなさきは有とこそきけみつからと申はけいたんこくの大わうのいつきのひめにてさふらふなるかあるきさきのさんによりうつほふねにつくりこめさうははん里へなかざる、たま／＼きとくふしきにしんりにあひたれはさりとともこそおもひしにないのつみにうきかいていにしつむへきそうらめしきよと大きくとくみたれかみをつたひてなみたのつゆのこほる、はつらぬくたまのことくなりしもおひたるをみなへししたはしほる、ふせひしせいしかやさうにすてられてひしきものにはそてしぬれはずひ、もなしとわひけるもいまこそおもひしられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちひるも、のこひにそあひきやうなみとなみたにうちぬれものおもふ人のふせいかやうちむつけたる

國本3 すいしゆかんとりこれを見ておのまさかりをなけすてあつとはかり申（脱文アリ）万ここれを見てをのまさかりをなけすて、あつとはかり申万ここれ見ていかさまにも御みは人のふせいかやうちむつけたる

慈受院 すいしゆかんとりこれをみてをのまさかりをなけすて、あつとはかり申まんこ此よし見るよりもいかさまにも御身はてんまはしゆんのけけんにてしやうけをなさんそのためなあやしやかにといひければなにと物をはいはすしてた、なみたくみたるはかりなりまんこかさねて申けるはいやなにとたるませ給ふともせひにつけておほつかなした、た、かいていにしつめくつとなせよといさみをなせはあらけなきつわもの御てにすかりてうみへいれんとすりうによはいと、あこかれてあらうらめしの人のことはやのにふしやまをいゑとするこらふやかんのたくひたにもなさきはあるとこそきけみつからと申はけいたんこくのたいわうのいつきのひめにてさふらふなるかあるきさきのさんによりうつほふねにつくりこめさうははんりへなかざる、たま／＼きとくふしき

にしりんたくくにあひたればさりともしこそおもひしになにのつみに二たひうきかひていにしつむへきそう
 らめしきよとかきくとくみたれかみをつたひてなみたのつゆのこほる、はつらぬくたまのことくなりしもお
 ひたるおみなへししたはしほる、ふせいしせいしかやさうにすてられてひしき物にはそてしぬれほすひ、もな
 しとわひけるもいまこそおもひしられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちひるも、のこひあるあ
 ひきやうなみなみたにうちぬれ物おもふ人のふせひかやうちむつれたる

大頭本すいしゆかむ取これを見てをのまさかりをなけ捨てあつとはかり申万此よし見るよりもいか様にも御みはて
 むまはしゆむのけ、んにてしやうけをなさむ其ためなあやしやいかにとひければ何と物をはいはずして涙く
 みたるはかり也万こ重て申けるは何とたるませ給ふともせひにつけておほつかなした、海底にしつめみくつに
 なせといさみをなせはあらけなきつはもの御てにすかり海へいれんとす龍女はいと、あこかれてあらうらめし
 の人の言葉のにふし山を家とするこらうやかむのたくひさへ情はありとこそきけみつからと申すはけいたむこ
 くの大王のいつきの姫にてさふらふなるかあるきさきのさむによりうつほ舟に作り籠さうは万里へなかさるる
 たま／＼きとくふしきに人倫にあひたればさりともしこそおもひしに何のつみにふた、ひうきかいていにしつ
 むへきそうらめしきよとかきくとくみたれかみをつたへてなみたの露のこほる、はつらぬく玉のことくなり霜
 をおみたるをみなへし下葉しほる、風情しせいしかやさうに捨られてひしき物には袖しぬれほす日もなしとわ
 ひけるも今こそおもひしられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちひるも、のこひますあひきやう
 なみたにうちぬれ物おもふ人のふせういかやうちむつけたる

整版本水取、楫取、これを見て、斧、鉞を投げ捨てて、「あつ」とばかり申。万子、此由見るよりも、「いか様にも、

おんみは天魔波旬の化現にて、障礙をなさむそのためな。何と物をば言はずして、ただ涙ぐみたるばかりなり。

万戸、重ねて言ひけるは、「いや、何とたるませ給ふとも、是非に付けておぼつかなし。只海底に沈め、水屑になせ」と、勇みをなせば、荒けなき兵、御手に縋り、海へ入れむとす。竜女はいとゞあこがれて、「あら、恨めしの人の言葉や。野に伏し、山を家とする、虎狼野干の類だにも、情はあるとこそ聞け。自らとまうすは、契丹国の大わうの、いつきの姫にて候ふなるが、ある後の讒により、空舟に作り籠め、滄波万里へ流さるゝ。たまく奇特不思議に、人倫に会ひたれば、さりともしこそ思ひしに、何の罪に、憂き海底に沈むべきぞ。恨めしさよ」とかき口説く。乱れ髪を伝ひて、涙の露のこぼるゝは、貫く玉のごとくなり。霜を置ひたる女郎花、下葉萎るゝ風情し、西施がやさうに捨てられて、「引敷物には袖し濡れ、干す日もなし」と侘びけるも、今こそ思ひ知られたれ。桂をかきし黛、蓮を含む口びる、百の媚ます愛敬、波と涙にうち濡れ、もの思ふ人の風情かや。うちむつけたる

國本1の29丁オ・ウに見える「すいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなけすて、てあつとはかり申」以下の本文は、國本2、慈受院本、大頭本、整版本にも有するが、國本3には脱落している。このことは、本文系統の問題ではなく、國本3の書写者の目移りによるものと思量される。

(四)『大織冠』の本文異同2

本節では、國本1の45丁オの「つゝ、むへきにてあらされはありのまゝに申あくる」以下の部分における本文異同について指摘したい。

國本1つ、むへきにてあらされはありのまゝに申あくる（脱文か）かまたり聞召れてあまりおもへはむねんなるに
 國本2つ、むへきにてあらされはありのまゝに申あくる（脱文か）かまたりきこしめされてあまりおもへはむねんなるに
 國本3つ、むへきにて候はすありのまゝに申此玉をとらんとてりうわうとゝにしまふすをしみてさらにいたさすし

ゆらをかたらいはわんとすらんだ、かいをのつからことはにもへかたし筆にもいかてつくすへきお、くのし
 ゆらうちとつてりうわうなふをやめすいまはと心やすくしさぬきのくにふさ、きのおきをとりしときなかれ
 きをとりしときなかれき一ほんうかんでありすいしゆかんとりあやしみをなしとりあけわつて見るにてんか
 ふさうのてん女ありうみへいれんとせしときりうていこかれかなしむをあまりに見ればかはゆさにた、一夜と
 うせんすひまをうか、い忍ひ入とりてうせぬと申かまたり聞しめされて思へはむねんなるに

慈受院

つ、むへきにて候はすありのま、に申このたまをとらんとてりうわうと、しまふすおしみてさらにいたさす
 しゆらをかたらひてうはふとらむとすちんのだ、かひをのつからことはにもへかたしふてにもいかてつくす
 へきおほくのしゆらをうちとつてりうわうなふをやすめいまはとこ、ろやすくしてさぬきのくにふさ、きのお
 きをとをしときなかれ木一ほんうかへすいしゆかむとりあやしめをなしとりあけわつて見るに天下ふさうの
 てんによりうみへいれむとせしときりうていこかれかなしむをあまり見ればかはゆさにた、一夜とうせんすひ
 まをうか、ひしのひいつてとりてうせぬと申かまたりきこしあまりおもへはむねんなるに

大頭本

つ、むへきにて候はすありのま、に申へし此玉をとらんとて龍王度々に所望するをしみてさらにいたさすしゆ
 らをかたらひとらんとすちむのた、かひをのつから言葉にもへかたしふてにもいかてつくすへきお、くのし
 ゆらを打とつて龍王なうをやすめ今はと心やすくしさぬきの國ふさ、きのおきをとりし時なかれ木一本うか
 むたりすいしゆかむとこれを見爰にきたいなる木こそ候へ天ちくたうとのちむかうはしふかれてなかる、やら
 むと人々あやしめたりければ万こ此よし聞よりも何のあやしめ事そとりあけよとけちをなす御意にしたかひと
 りあけ見るにちむかうにてはなしあやしやわつて見よとてとりあけ見るに天下ふさうの天女あり海へいれむと
 せし時りうていこれかなしふを見れば餘かはゆさにた、一夜とうせむすひまをうか、ひしのひ入てとりてうせ

ぬと申かまたり聞しめされて餘おもへは無念なるに

整版本包むべきにてあらざれば、有りのまゝにまうし上ぐる。(脱文か) 鎌足きこしめされて、「あまり思へばむねんなるに、

國本1の45丁オの「つゝむへきにてあらされはありのまゝに申あくる」以下の部分、國本1、國本2、整版本は同様の形をとり、「ありのまゝ」に該当する内容を記さない。しかし、國本3、慈受院、大頭本は、万戸將軍が流木から出現した童女に水晶の玉を奪われた経緯を鎌足に言い訳をした「ありのまゝ」を載せる形をもち、万戸將軍の、軽率で道化的な人間像を形象しているといえる。もちろん、この本文異同だけで諸本間の生成過程を述べることは避けたい。

なお、恋田知子氏が、他本「大織冠」とあるところ、慈受院本と『大英絵巻』とが「淡海公不比等大織冠」とあることを指摘されているので、次に、当該箇所のみ、國本1・國本2・國本3と慈受院本とを校合する。

國本1 いまはなにをかつ、むへきわれこそみやこにかくれもなき……………たいしよくわんとは我・事・事・なり

國本2 いまはなにをかつ、むへきわれこそみやこにかくれもなき……………たいしよくわんとはわかことなり

國本3 今・はなにおかつ、むへき我・こそみやこにかくれもなきたんかいこうふきとう大・しよくわんとはわかこと也・

慈受院 いまはなにをかつ、むへきわれこそみやこにかくれもなきたんかいこうふきとうたいしよくわんとはわか事・なり

國本3にも「たんかいこうふきとう大しよくわん」との本文があった。鎌足が「大織冠」とあるのか、それとも「淡海公不比等大織冠」とあるかだけで、『大織冠』の成立と不平等を主人公とした珠取り説話と結びつけることは難しいのではないだろうか。

二、『大織冠』（國本1）の挿絵の構図

國學院大學図書館に所蔵されている『大織冠』（國本1）の挿絵の構図の特徴について、國學院大學図書館所蔵『大織冠』（國本2）・『たいしよくわん』（國本3）の挿絵の構図との相違、分析を通して確認したい。

第1図は、見開き一丁分の長大図で、鎌足一行が春日大社に参詣した場面である。本文「いつもかまをもち給へはかまたりのしんとも申す也春日のみやにさんろうありてあまたのくわんをたてさせ給ふ（図1）中にもこうふくしのこんたうをさいしよに御こんりうあるへしとてしやうこん七ほうをちりはめしやこんたうをたてさせ給ふ」に相当する。左半丁に鎌を持った鎌足と春日大社の鳥居が描かれ、右半丁に鎌足を先導者とする一行が描かれている。國本2も國本3も、鎌足一行が春日大社を訪問する図であるが、いずれも鎌足の持つ鎌は描かれていない。

第2図は、半丁分の図で、唐の勅使が鎌足邸を訪問した場面である。本文「うんかすてに太宗のきんさつを給はり数千里のかいろをすき日本ならのみやこにつきたいしよくわんのみもとにてうさつをさゝくたいしよくわんは御らんして（第2図）我はこれしちいきとて小國のわうのしんかとしいかにとしていこくの大わうをさうなくむこにとるへきと一度はちよくしをちたいある」に相当する。上下二段に分けられた構図をとり、上段の図に、左側に鎌足、右側に鎌足に書状を捧げる唐の勅使運賀、奥の屏風には画中画として興福寺を風景の一部とする水墨画、左奥には棚に置かれた巻物類、廊下には鎌足の従者が描かれている。下段の図には、唐の勅使の従者が左右に控える様子が描かれている。なお、國本2には該当の図はない。國本3には、鎌足邸へ臣下の者が訪問した図、唐の勅使が皇帝に報告をした図を経て、当該図がある。

第3図は、見開き一丁分の長大図で、紅白女が難波の港から唐国へ渡海する場面である。本文「卯月もやうくす

ゑになりゆきければ吉日をえらひ玉の御こしを奉りなむはのうらへ御いてありそれよりもれうとうけきしうにめされしゆんふうにめされほをあげければ舟はほとなくないたうのみやうしうのみなとつかせ給ふ」に相当する。右半丁に、難波の浦で御輿の中で船を待つ紅白女、左半丁には、出航を待つ龍頭鷁首の二艘の船が描かれている。國本2にも、紅白女が唐へ向かつて出航した龍頭鷁首の二艘の船が描かれている。なお、國本3には、唐へ戻る唐の勅使の一艘の船の図を経て、当該図として紅白女を乗せた一艘の船が描かれている。

第4図は、半丁分の図で、唐の太宗皇帝に入内した紅白女の功德が施された場面である。本文「かゝるみちくゝよりもみつきものをそなへきさきをおかみ奉るあらありかたやた、ひとめおかみ申人たにもひんくをのかれたちまちにふつきの家と成されはやくわうていもれうかんにしたしみなれちかつかせたまへはしよひやうをいやしたちまちにやうしやうの大いにあるこゝちして御持の間世すなほにたみのかまともゆたかなり」に相当する。奥の間の右に盃を持ち椅子に座る太宗皇帝、左に椅子に座る紅白女、廊下には伺候する諸侯が描かれている。國本2には、奥の間で、右に紅白女、左に太宗皇帝が椅子に座る様、右手前に諸侯が樓門に集う様が描かれている。國本3には、唐の太宗皇帝と入内した紅白女が一つの玉座とともに座る様が描かれている。しかし、いずれの図も、「たみのかまともゆたかなり」の本文に該当する図はない。

第5図は、半丁分の図で、后となつた紅白女が太宗皇帝の下で鎌足に興福寺の仏具法具を送ることを相談する場面である。本文「かゝるたからのその中にしやくせんたのみそきにて五寸のしやかをつくりたてにくしきの御しやりを御しんに作りこめなからはう八寸のすいしやうのたうのうちにおさめてむけほうしゆと名付てこれを一のてうほうにしてをくりふみをへつしにかいきしのはこにおさめてをくらせ給ひけるとかやこの玉はすなはちこうふくしのほんそんしやかほとけのみけんにいりはめ給ふへきなりとかきこそをくりたまひけれ」に相当する。奥の間の右に太宗皇

帝、左に紅白女が椅子に座り、その手前に諸侯が控えている姿が描かれている。國本2、國本3に該当する図はない。

第6図は、半丁分の図で、宝珠を載せた万戸將軍の船を修羅軍が待ち伏せしている場面である。本文「かのしゆらの大しやうまけいしゆらもろ／＼のけんそくをひきくしてこそ出られけれ（中略）日本と唐土のしほさかひちくらかおきにちんをとりまんこか舟をまちゐたり是をはしらてまんこしゆんふうにほをあげこゝろにまかせてふかせゆくに日比ありとも覚えぬところにしまひとつうかへり見れははたしひるかへしくろかねのたてのあひたよりつるきやほこのいなひかりたうちやうのかけともかうんかのことく見えければあれはなにといへるしさいそやいかなることのあるへきそとこゝろもとなくおもはれたけれとさもあらぬてにてふかせゆくに」に相当する。右手前に敵情を視察する万戸軍、左に盾で身を隠す修羅軍の様が描かれている。國本2は、右に万戸將軍の軍船、左に待ち伏せをする修羅軍が描かれている。國本3は、画面上に島一つ、画面下に、鉾、盾、旗は見えるものの、待ち伏せをする修羅軍の眷属の姿も、また万戸將軍の軍船も描かれていない。

第7図は、見開き一丁分の長大図で、万戸將軍と修羅軍とが合戦する場面である。本文「まんこはめいよのむまのり海のうへにてのるたつなさうかいふとりうはいふのりうかめたるむまのあしゆんでのものをつくとときあふきやうのたつなきつとひくめてのものをつくとときにふきやうのむちをちやうとうつにくるものをふとときにはせんきやうあをりのあしふみのむちをきよくしんたいに乘たりけり西から東へうつてとをるときには三百余人かあとに付て爰をせん」と、きりたりけりいれかへ／＼たたかへはしゆらかくさほたれか、つてかなふつへしも見えざりけりそう大將のまけいしゆら八めんはつひをふり立て八つしたのほこをうちふり討死こゝなりとおめきさげんてかけにけり」に相当する。右半丁に馬に乗る万戸將軍と軍船、左半丁に盾の前に出て大音声をあげる修羅軍の大將が描かれている。國本2も見開き一丁分の図で、右半丁に万戸軍の四騎が海上を駆け、左半丁に海上で勇壯に戦う修羅軍の様を描く。國

本3も見開き一丁分の図で、右半丁に船上で敵を迎え撃とうとする万戸將軍の様、左半丁に海上で声を上げ弓矢をひこうとしている修羅軍の様を描いている。続いて、國本3には、國本1の第7図に相当する一丁分の長大図で、右半丁に馬に乗る万戸將軍と騎馬軍、左半丁に大音声をあげる修羅軍の様が描かれている。

第8図は、半丁分の図で、流木から顕現した美人が自らの来歴を語る場面である。本文「人のことはや野にふし山を家とするこらうやかんのたくひたにもなさけは有とこそきけみつからと申はけいたんこくの大わうのいつきのひめてさふらふなるかあるきさきのさんによりうつほふねにつくりこめさうは万里へなかさるゝたま／＼きとくふしきにしりんにあひたれはさりともとこそおもひしになにのつみにうきかいてにしつむへきそうらめしきよとかきくとくみたれかみをつたひ涙のつゆのこほるゝはつらぬくたまのことくなりしもをおひたるをみなへし下葉しほるゝふせいしせいしかやさうにすてられてひしきものにはそてしぬれほす日もなしとわひけるも今こそおもひしられたれ」に相当する。國本1は、小舟に立てかけられた木の中から美人が出現して来歴を語る様を描かれている。國本2、國本3は、本文「なかれ木一本うかんでありすいしゆかんととりこれをみてこのほどの大風にてんちくたうとのちんかうはしふかれてなかるゝやらんと人ゝあやしめたりければ万子此よしきくよりもなんのあやしめ事そたゝとりあけよとけちをなす御ちやうにしたかひはしふねおろしとりみるにちんかうにてはなしあやしやわつて見よとて此木をわつて見るになにとことはのへかたきひしん一人おはします」に相当する。國本2は小舟に引き上げられた流木から美人が出現する様、國本3は、龍頭鷁首の二艘の船の図及び海に浮かぶ流木を描いた図を経て、流木の中から美人が出現した様を描かれている。

第9図は、半丁分の図で、万戸將軍が童女と仏法問答をする中、童女に懸想をした場面である。本文「あらしゆせうや扱はこしやうの御ためにきんかいをたもたせ給ふかそのかいもんの中に六はらみつのぎやうあり其中にとつてもんにくはらみつとは人のこゝろをやふらやふりなは佛とさらになりかたしされはにや佛には三みやう六つうおはします

これはひとへにくわこにしてしよはらみつをきやうせしくとく今にあらはれて佛となり給へる（第9図）…ぬんようふたつ和合のみちいもせふうふのなからへこれ佛法のみなもとおろかにおもふへからす御なひきあれやとそおもふいかにくと申ける」に相当する。船の奥で、万戸將軍が「御なひきあれやとそおもふいかに」と申ける」と、童女に言葉をかけて様が描かれている。國本2、國本3は、画面中央に、船の中で万戸將軍と童女とが語り合う様が描かれている。

第10図は、半丁分の図で、童女が仏法問答をする中で、万戸將軍に反論をする場面である。本文「…来もせずさりもせずいつもたえせずましますほつしん佛と申形をつくりあらはししやうとを立てすみかとし給ふをほうしんふつと申なり八相成道したまひて法をときすなはち衆生をりやくしたまふを應身仏と申也三身をとりわきしむをしんするはざとりのまへの佛なり三しん一そくとくわんしいつれをもしんするをざとりのまへと申佛とならんそのためなんきやうくきやうせんものいかでせんあくみたるへき身はいたつらになさるゝとかなふましとおほせける」に相当する。前図の続きで、童女が水晶の玉を持ち、万戸將軍に反論をする様を描いている。國本2は、船上で万戸將軍と童女とが語り合う様が描かれている。國本3は、船の舳先に座る万戸將軍と童女、童女の前に水晶の玉が納められている石櫃が描かれている。

第11図は、半丁分の図で、童女が万戸將軍を欺き、石櫃の中の水晶の玉を奪って海に逃げ入る場面である。本文「さても〱御身は何として御そんし候ひけるそやさしくも御しよもふ候ものかなさらはそつとおかせ申さんとてくるかねしやうをさしめんはんをもつてふうしたる石のからうとのうちよりもすいしやうの玉をとりいたしりう女のかたへわたすけいせいと書てはみやこかたふくとよまれしも今こそおもひしられたれかくてしうあひれんほのわりなきちきりと見えつるか三日もすきさるにかきけすやうにうせぬ玉はいと人にみせければとりてうせぬと申」に相当する。船の中で驚愕する万戸將軍、画面中央手前に水晶の玉を奪い海に入る童女の様が描かれている。國本2、國本3に当該図はない。

第12図は、半丁分の図で、万戸將軍が都に到着し、鎌足に水晶の玉以外の宝物を献上する場面である。本文「このことからをさきとしていそぎ都にのほりさまくのほうふつをとりいたしたいしよくわんにまいらせあくるたいしよくわんは御覽してをくりふみの其中に第一のたからものすいしやうの玉の見えぬはいかにとたつねとひ給ふつ、むへきにてあらされはありのま、に申あくる」に相当する。國本1は、上下二段に分けられた構図をとり、上段の図に、万戸將軍が鎌足に宝物を献上する様、奥の屏風には画中画として興福寺と思量される水墨画、廊下には鎌足の従者が描かれている。下段の図には、万戸將軍の従者が控える様が描かれている。國本2は、左奥の upper 段の間に鎌足、下段の間に万戸將軍と献上する宝物が描かれている。國本3は、左奥の間に鎌足、廊下に万戸將軍、庭には鎌足の従者と万戸將軍の従者とが宝物の受け渡しをする様などが描かれている。

第13図は、半丁分の図で、鎌足が水晶の玉を取り戻そうと房崎に下向し海女に出会う場面である。本文「われもちかひてねかはくはしやうくせ、のあひたにこの玉にをひてはとらふすものとおほしめしみやこのうちをしのひ出かたちをやつしたまひ又ふさ、きへくたたる、(第13図)かのうらにつき給ひ浦のけしきを見たまふにあまともおほくあつまりてかつきする事おひた、しくかのあまの中にとしのよはひはたちはかりに見えみめかたちしんしやうなる海女を待つ鎌足かるすいにもつれてあそふ事た、へいろをつたふことくなりかまたり見こめ給ひて」に相当する。國本1は、房崎で海女を待つ鎌足、海に入り魚貝をあさる海女、小舟で網を引く海女を描く。國本2は、鎌足が海辺に立ち、小舟に乗る海女を迎えとる様を描く。國本3は、鎌足が水晶の玉を取り戻そうと房崎に下向する様だけが描かれている。

第14図は、半丁分の図で、鎌足が海女と契り、子と暮らす場面である。本文「うき身なからまきのとをあけぬくれぬとすきゆけは三とせになるはほともなし(絵第14図)かくて男女のなからへわりなきなりなかのちきりにやわかき

み出来給ふいまはたかひになに事もうちとけたりしいろ見えたり」に相当する。國本1には、家の奥で、鎌足と、乳飲み子をあやす海女、庭で三人の子供が遊ぶ様が描かれている。國本2には、当該図はない。國本3は、海浜で一人の子供と戯れる鎌足、海の中で遊ぶ四人の子供の様の図を経て、國本1と同図の挿絵として、右に邸の中で乳飲み子を抱く海女とそれを見守る鎌足、左に三羽の水鳥と海浜の様が描かれている。

第15図は、見開き一丁分の長大図で、鎌足の依頼で水晶の玉を探しに行った海女が鎌足に竜宮城の様子を語る場面である。本文「：五しきのれんけをひふしあをきくちなうおほくしてれんけのこしをまとへり（中略）りうくしやうこれなりけりへいるりのはしらをたてめなうのゆきけたにはりのかへを入にけり（中略）もろくの小りうとくりうこかねのよろひかふとを着て四つの門をまほれり」に相当する。そこで、あらためて、海女は、「扱もたつぬる玉をはへちにてんをつくつてたからのたをたてならへかうをもりはなをつみ二六時中にはんのおりいねうかうかう中々に申に及はさりけり八人のりうわう時々刻々にしゆこすれはこのたまをとらん事今生にてはかなふましまして未来てとりかたしおほしめしきりたまへわかきみとこそ申ける」と、竜宮城から水晶の玉を取り戻すことは難しいと訴える。國本1は、左の奥の部屋に安置されている水晶の玉が、右半丁に竜宮城の楼門とそれを守る眷属が描かれている。國本2は、房崎で、竜宮城へ向かう海女とそれを見送る鎌足の様が描かれ、國本3では、房崎で、竜宮城へ向かう海女とそれを見送る鎌足の様が描かれている。國本2、國本3ともに竜宮城の様子は描かれていない。

第16図は、見開き一丁分の長大図で、鎌足が海女を助けようと海上で舞楽を催した場面である。本文「やかてみやこへししやをたて舞ぬしをめしくたしあたりのうらのふねをよせしゆたんをもつていろとれるふたいをこそはりたてけれ（中略）八大りうわうしゆらいしてせんきまちくなりけりなんせんふしうふさ崎のうらにしてほう座をかさりちうしやうあるいさやらいりんやうかう成てちやうもむせんとせんきしてそこはこのけんそく共をひきくしてこそ出

られければにりうしん出たまへは國中のちこたち身をかさりまうけこ、をせんと、まひ給ふた、天人のことくなり」に相当する。國本1は、右半丁に経を読む大僧正、鎌足の従者、樂士三人、右下には舞樂に誘われ海上に踊れた竜王たち、左半丁には、鎌足、舞を舞う者二人、樂士三人、部屋には侍女たち、部屋奥には画中画である水墨画に興福寺が描かれている。國本2は半丁分の図で、右上に、海上で催す舞樂の様、左下に竜王が眷属とともに海上に踊られた様が描かれている。國本3は國本1と同じく見開き一丁分の長大図で、左半丁に海上の舞台で舞樂が催される様が、右半丁に舞に誘われた竜王が眷属とともに海上に出現した様が描かれている。

第17図は、半丁分の図で、大蛇（竜）が水晶の玉をもつて逃げる海女を追いかける場面である。本文「今はかうと見えしところに玉をまほれるりうこのよしを見つけあとをもとめてをふ事はた、みつはのそやをいることくせんちうの人々あはやほのかに見ゆるはくりあけよとけちするにあまのあとにつゐてひとつの大しやをふてくる（中略）かまたり御らんしきよけんをぬきようちのとききつねのあたへたひたる一つのかまにとりそへとんていらんとし給ふを船中の人々ゆん手めてにすかつてこはいかにとてと、めけり」に相当する。國本1は縦に構図をとり、剣を抜いて大蛇（竜）に立ち向かう鎌足、玉を鎌足に渡そうとする海女、それを追いかける大蛇（竜）の様が描かれている。國本2は構図を横にとり、國本1と同じ内容を描き、國本3では、「鎌」を持つている鎌足、繩に引かれる海女、それを追いかける大蛇（竜）の様が描かれている。

第18図は、半丁分の図で、鎌足ら人々が海女の死を嘆く場面である。本文「女ははかなきありさまかな男のめいをそむかしとていのちをすつるはかなさよもし火にきゆるよるのむしはつまゆへその身をこかすなりふえによるあきのしかははかなききりに命をうしなふそれはみなくしうあひれんほのわりなきききりとは云なからかゝるあはれはまれなるへしわれには二世のきゑんなれは又こん世にもあひ見なむなんちはいまこそかきりなれわかれのすかたを

よく見よとて御なけきはかきりなし」に相当する。國本1では、着物に覆われた海女の亡骸、そのそばに鎌足と稚児が描かれ、海女の亡骸そのものは描かれていない。また、奥の屏風には画中画として興福寺と思量される水墨画が描かれている。國本2では、小舟に引きあげられた海女に見入る鎌足の様子が描かれている。國本3では、房崎の浜辺で、鎌足に抱かれた海女にとりすがる稚児の様子が描かれている。なお、國本3は、本図を経て、最終図として、水晶の玉が興福寺の本尊の仏の眉間にはめられたことを暗示する興福寺五重塔が描かれている。

國本1の第2、12、16、18図における画中画の水墨画に興福寺が遠景として描かれていることは興味深い。画中画に展開する水墨画の興福寺は、『大織冠』の生成過程における興福寺縁起の絵解き、唱導の世界の一つの有り方を象徴しているのではないだろうか。

三、『大織冠』（國本1）の制作時期

國學院大學図書館には、奈良絵本、奈良絵巻と称される御伽草子群が収蔵されている。『舟のゐとく』、『呉越絵』、『張良物語』などである。これらの作品は、参考に示したように、物語冒頭の書き出しの詞書の「それ」をはじめとして、「て」・「國」・「人」・「乃」・「代」・「あ」の崩し方が同一であり、漢字のルビの振り方も同一である。これらをつまえる⁹と、『大織冠』（國本1）は冊子本であるが、絵巻の体裁をとる『舟のゐとく』、『呉越絵』、『張良物語』と同じ詞書書写者によって制作された作品といえるであろう¹⁰。

また、参考図として掲げたように、『大織冠』（國本1）の第15図における、鎌足の依頼で水晶の玉を探しに行った海女が童宮城の様子を鎌足に語る場面において、眷属が守る童宮城の楼門の屋根の描き方は、『舟のゐとく』（上巻第1図）で蚩尤が皇帝の忙殺を謀議している場面における楼門のそれと、『呉越絵』（上巻第1図）で越王勾践が臣下と

謁見している場面における楼門のそれと同じ手法で描かれていると思量される。¹²⁾

詞書書写者、挿絵図の描写方法から、『大織冠』（國本1）は、國學院大學図書館に収蔵されている『舟のりとく』・『呉越絵』などと同じ時期、江戸時代前期（寛文・延宝期）頃に制作されたものと推定される。

四、國學院大學図書館所蔵『大織冠』、『舟のりとく』、『武家繁昌絵巻』における神功皇后譚

幸若舞曲『大織冠』の成立、享受の問題として神功皇后譚があるとの蓋然性について述べてみたい。濱中修氏、阿部康郎氏が、『舟のりとく』の生成過程において幸若舞曲『大織冠』との関係について論述されている。¹³⁾ 針本も、神功皇后譚と、國學院大學図書館所蔵『舟のりとく』、『武家繁昌絵巻』との関係性について述べたことがある。¹⁴⁾

國學院大學図書館所蔵『舟のりとく』下巻の冒頭が、次のように神功皇后譚としてはじまっている。

又十五代の女帝神功皇后は仲哀天皇の御かたき新羅國をせめ給はんためつくしちくぜんの博多にいたり給ふ住吉大明神はこれ海神なれば御舟しゆごのため御ともにしたかひ給ふを大將軍を給はり舳さきにす、み給ふかそうもんあるは龍神のもつなるみちひの玉をからせたまへかしと皇后それはいか、せんとちよくぢやうある明神かしこまり我はかりことをめぐらすへしとて海上に船をあまたうかへてそのうへに舞臺をかまへ十二人の児をじんじやうに出た、せをんかくをしらへてまひあそふそのたえなるこゑ上は悲相天までもひ、き下はこんりんさいまでも聞ゆへきとそ身にしみけるさるほどに海底にすむ磯良といふもの此こゑにひかれておほえず海上にうかひてこれをみる住吉大明神いそらめして我君異國たいちに行幸なるに何とていま、てはまいらざるそとのたまへは磯良かしこまり我ひさしく海中にすんですかた見くるしきをはちてとそうもんす皇后せんしあるは龍神のもつなるしほひるしほみつふたつの玉をとりてえさせよとのたまへはいそらうけたまはりやすき勅定なりとて御前をたつて海に入ぬしはらくありてふたつの玉を

さ、けて来るみかこの玉をかりえさせ給ひ新羅にわたたりてつかなく賊徒ぞくとをほろほしかへりたまふ

右の神功皇后譚の要点を確認すると、

- ① 神功皇后は新羅征伐にあたり、住吉明神の奏上により「龍神のもつなるみちひの玉」を手に入れることになる
 - ② 神功皇后は十二人の舞姫を舞台にあげて舞楽を催し、海底に住む「磯良」を誘い出す
 - ③ 「すかた見くるしき」磯良が、海中に行き、「しほひるしほみつ」の二つの宝珠を持ち帰る
 - ④ この二つの宝珠により、神功皇后は新羅征伐をはたすことになる。
- と、まとめることができる。

また、物語絵としての神功皇后譚を持つ『武家繁昌絵巻』にも近似する記述がある。國學院大學図書館所蔵『武家繁昌絵巻』の当該場面が次のようにある。

そのころ新羅百済高麗の三韓この日本をうか、ひわがてうをうばひとらんとせしかは皇后やすからすおほしめしつはものをあつめていくさの御かどいでありけるに鹿嶋香取の明神は御舟のとも舳にたち住よしの明神はああらみさきとなり給ふなおこの國の武備をそなへそなへんとてりうぐう城にありといふ塩満塩ひる珠をもとめ給ふ海中すみ給ふなる阿曇の磯良といふ神を御使にとおほしめせともかたち見にくき事をはぢてあらはれ出給はす皇后すなはち磯ちかくかりやをうち諸神をあつめ神樂催馬樂さま／＼也なりけるに磯良たへかねて大なる龜にのり面にふくめんして波のうへにうかひ給ふそのありさま手あしにもぞびらにも斬なんどいふもろ／＼の貝ひしととりつき侍へりかたちの見にくきをはぢて出さりしに御神樂の面しろくあまりにたへかねあらはれたりとの給ふ皇后おほせけるはりうぐう城の塩みつ塩ひるふたつの珠をかりてあたへ給へとこのときいそらかしこまりてりうぐうに行てかりえてたまつり給ひけり皇后すなはち三韓をせめ給ひつゝあにいくさのうちかち給ふこれより日本又十五代の女帝ていじんぐうくはうてう神功皇后は

仲哀天皇の御かたき新羅国をせめ給はんためつくしちくぜんの博多にいたり給ふ住吉大明神はこれ海神なれば御舟しゆごのため御ともにしたかひ給ふを大將軍を給はり舳さきにす、み給ふかそうもんあるは龍神のもつなるみちひの玉をからせたまへかしと皇后それはいか、せんとちよくぢやうある明神かしこまり我はかりことをめぐらすへして海上に船をあまたうかへてそのうへに舞臺をかまへ十二人の児をじんじやうに出た、せをんかくをしらへてまひあそふそのたえなるこゑ上は悲相天までもひ、き下はこんりんさいまでも聞ゆへきとそ身にしみけるさるほどに海底にすむ磯良といふもの此こゑにひかれておほえす海上にうかひてこれをみる住吉大明神いそらをめして我君異国たいちに行幸なるに何とていま、てはまいらざるそとのたまへは磯良かしこまり我ひさしく海中にすんですかた見くるしきをはちてとそうもんす皇后せんしあるは龍神のもつなるしほひるしほみつのふたつの玉をとりてえさせよとのたまへはいそらうけたまはりやすき勅定なりとて御前をたつて海に入ぬしはらくありてふたつの玉をさ、けて来るみかとの玉をかりえさせ給ひ新羅にわたりてつつかなく賊徒をほろほしかへりたまふ

右の神功皇后譚の要点を確認すると、

- ① 神功皇后は新羅征伐にあたり、住吉明神の奏上により「龍神のもつなるみちひの玉」を手に入れることになる
- ② 神功皇后は十二人の舞姫を舞台にあげて舞樂を催し、海底に住む「磯良」を誘い出す
- ③ 「すかた見くるしき」磯良が、海中に行き、「しほひるしほみつ」の二つの宝珠を持ち帰ると、まとめることができる。
- ④ この二つの宝珠により、神功皇后は新羅征伐をはたすことになる。

國學院大學図書館所蔵『大織冠』の神功皇后譚は、第16図に相当し、鎌足が海女を助けようと海上で舞樂を催した場面として、次のように展開していた。

やかてみやこへししやをたて舞ぬしをめしくたしあたりのうらのふねをよせしゆたんをもつていろとれるふたいをこそはりたてけれ（中略）八大りうわうしゆらいしてせんきまち／＼なりけりなんせんふしうふさ崎のうらにしてほう座をかさりちうしやうあるいさやらいんやうかう成てちやうもむせんとせんきしてそこはこのけんそく共をひきくしてこそ出られければすてにりうしん出たまへは國中のちこたち身をかさりまうけこ、をせんと、まひ給ふた、天人のことくなり

右にあるように、鎌足の設けた舞台で音楽が催され、それにより龍神たちが海中から出現し、「國中のちこたち」は「こ、をせんと」と舞うのであった。『大織冠』の生成過程の水脈の一つに神功皇后譚が物語絵とともに思量されるのである。

註

(1) 『大織冠』（國本2）は、全二冊。四ツ目綴、縦十七・三厘、横二五・五厘、一面十四行、挿絵は上册に七図、下冊に五図、料紙は間に合紙（國學院大學創立百三十年周年記念 國學院大學古典籍解題 中世散文学篇）【二六一】「大織冠」武田祐吉博士旧蔵本 五〇四・五頁 平成二十六年二月 國學院大學）。

なお、本書の詳細な解題が、徳田和夫氏によってなされ、当該伝本は、「大頭系統の特に上山宗久本のごとき正本本文系統にある十行古活字本や寛永製版本と親子関係、あるいは兄弟関係にあるものとしてよいだろう」（『國學院大學図書館蔵 武田祐吉博士旧蔵本解題』【二十五 大織冠】七六・七七頁 角川書店 昭和六十年）と論究されている。

(2) 『たいしよくわん』（國本3）は、全一冊。元來二冊であったものを一冊に仕立て直している。縦三十・四厘、横二二・九厘、一面十一行、挿絵は二四図、左肩に朱題箋「たいしよくわん」（縦二十・〇厘、横二・六厘）がある。

(3) 恋田知子氏は、薄雲御所慈受院所蔵『大織冠絵巻』の全文翻刻をふまえて、『大織冠』絵巻・絵本の構造と展開」と題して、『一 慈受院蔵『大織冠絵巻』の紹介』、『二 現存絵入り諸本概観』、『三 慈受院本の位置づけ―大英絵巻との近似性―』、『四 巻頭・巻末図にみる絵入り諸本の特徴』、『五 慈受院本の意義―讃州志度寺道場縁起とのかかわり』の五つの課題について

論じられている(薄雲御所 慈受院門跡 所藏 大織冠絵巻) 勉誠出版 二〇一〇年)。本稿をなすにあたって多くの学思をいただいた。また、『大織冠』の成立については、『謡曲拾葉抄』『海人』に「世に大織冠物語といへる古き草紙あり此謡は彼物語を以て作る也且又讃州四渡寺の縁起にも見えたり但淡海公の妹高宗皇帝の後に立せ給ふと云事本説更になし案するに鎌足の御子不比等は其母海人なる故に淡海公と號すといへる異議説などによりてかく世に云つたふ歟四渡寺縁起に悉く有といへ共信用しがたし日本紀十三年允恭天皇十四年秋九月：(日本書紀本文引用)(注(3)の後に当該本文を掲げる)：私云世に傳ふ處は此日本紀の説を以て云なるへし又唐土にも是に相似たる事あり：(國文註釋全書 第六卷) 五八七八頁 すみや書房 昭和四十三年再版)とある。謡曲『海人』の淵源に、大織冠物語、志度寺縁起ではなく、『日本書紀』允恭紀における赤石の真珠説話や漢籍の同種の説話などがあるというものである。この指摘について、阿部泰郎氏は、『大織冠』を読む場合、無媒介に『志度寺縁起』や『海人』を参照することは、あまり意味がなからう。(略)以下にこうした世界の消息をよく示すものである、海女説話をしるした三種のテキストを掲げよう。そして、これらを巡って、海女の珠取り物語が形成された過程と、その世界の様相を探ることとしたい。(一一八頁)と述べたうえで、『大鏡底容抄』所収の海女説話は、「当時、興福寺においてひろく通行していたものと云いうる。」(一二六頁)とし、『春日秘記』の分析をもとに、『志度寺縁起』『底容抄』、そして『秘記』における海女説話は、後者の二書が示すように、本来、興福寺と春日社の縁起説話であったと考えられる。(一三五頁)(『大織冠』の成立)『幸若舞曲研究 第四卷』八十―百九十八頁 三弥井書店 昭和六十年)と論究されている。國學院大學図書館所藏『大織冠』國本1の画中画の水墨画に描かれる興福寺の光景は、興福寺の縁起の絵解きを反映しているとも思量される。『謡曲拾葉抄』『海人』で引用された『日本書紀』の本文は、「十四年の秋九月の癸丑の朔にして甲子に、天皇、淡路島に獺したまふ。時に、麋鹿・猿・猪、莫々粉々に山谷に盈ち、焱のごと起ち蠅のごと散く。然れども、終日に一獸をだに獲たまはず。是に、獺止めて更にとふ。島の神、崇りて曰く、「獸を得ざるは、是我が心なり。赤石の海底に真珠有り。其の球を我に祠らば、悉に獸を得べし」といふ。爰に、更に処々の白水郎を集へて、赤石の海底を探らしむ。海深くして、底に至ること能はず。唯し一人海人有り。男狭磯と曰ふ。是、阿波国の長邑の海人なり。諸の海人に勝れたり。是、腰に繩を繫けて海底に入る。差頃之ありて出でて曰さく、「海底に大鯰有り。其の処光れり」とまをす。諸人、皆曰く、「島の神の請はする珠、殆に是の鯰の腹に有るか」といふ。亦入りて探る。爰に男狭磯、大鯰を抱きて泛び出で、乃ち息絶えて浪の上に死る。既にして繩を下して海底を測るに、六十尋なり。則ち鯰を割くに、実に真珠、腹中に有り。

其の大きさ、桃子の如し。乃ち鳥の神を祠りて獺したまひ、多に獸を獲たまふ。唯男狹磯が海に入りて死りしことをのみ悲しびたまひて、則ち墓を作りて厚く葬りたまふ。其の墓、猶し今に存れり。」(卷第十三允恭天皇十四年九月条) 一二三―五頁 新編日本古典文学全集『日本書紀』小学館)とある。

(4) 大頭左衛本『大織冠』の本文は、笹野堅氏編『幸若舞曲集 序説』(第一書房)による。

(5) 寛永整版本『大織冠』の本文は、『舞の本』所収(新日本古典文学大系59)による。

(6) 恋田知子氏は、他本「大織冠」とあるところ、慈受院本と大英絵巻とが「淡海公不比等大織冠」とあることをふまえて、「一見すると諸本冒頭に共通する鎌足Ⅱ不比等の誤伝によるものとも思われるが、この部分については大英絵巻の詞書にも同様に確認できるものであり、他の絵入り本、および幸若舞曲正本などには管見の限り認められない、両書のみ共通する独自詞章なのである。そこには、不比等を主人公とした珠取り説話を描く『讃州志度道場縁起』の影響による乱れの可能性がある」と論究されている(前掲注3書一〇一頁)。

(7) 國學院大學図書館所蔵『舟のあとく』の詞書の書写者について、筆者も指摘したことがある(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のあとく』の解題と翻刻」國學院大學校史・學術資産研究第二号 平成二十二年三月)。

(8) 國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の詞書の書写者について、筆者も指摘したことがある(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の解題と翻刻」國學院大學校史・學術資産研究第三号 平成二十三年三月)。

(9) 國學院大學図書館所蔵『張良物語』の特徴について、筆者も指摘したことがある(針本正行「國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解題と翻刻」國學院大學校史・學術資産研究第八号 平成二十八年)。

(10) 『張良物語』詞書の書写者として、『張良物語』と國學院大學図書館に所蔵されている『舟のあとく』、『呉越絵』、『咸陽宮』、『八幡の本地』・『清重』の冒頭の詞書を掲げ、『張良物語』は、『清重』を除き、『咸陽宮』、『舟のあとく』、『呉越絵』、『八幡の本地』と同じく、料紙の趣向をはじめ、一紙の行数、字数など、江戸時代前期(寛文・延宝期頃)の大型物語絵巻の体裁を有している。また、六つの作品における、「て」、「乃」、「代」、「人」、「國」などの文字の崩し方も酷似し、さらに、漢字の振り仮名の方法も同一である。(針本正行「國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解題と翻刻」國學院大學校史・學術資産研究第八号 平成二十八年三月)と指摘した。

(11) 石川透氏は、國學院大學図書館所蔵『舟のあとく』、『竹取物語絵巻』二点(武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本)、埼

玉泉立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』五軸、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語』絵巻、チエスタービイター図書館所蔵『舞の本絵巻』六軸、さらには、海の見える杜美術館蔵『保元・平治物語絵巻』なども同一の書写者によるものとされている（國學院大學図書館蔵奈良絵本・絵巻）針本正行編『物語絵の世界』八二―三頁、平成二十二年三月）、石川透氏・星瑞穂氏編『海の見える杜美術館蔵保元・平治物語絵巻をよむ 清盛榮華の物語』石川透氏「保元・平治物語絵巻」について九三―一〇一頁、平成二十四年七月 三弥井書店。

- (12) 『舟のめとく』と『呉越絵』の挿絵図との類似性について指摘したことがある（針本正行「國學院大學図書館所蔵『舟のめとく』と神功皇后譚」『物語絵の世界』平成二十二年三月）。また、『呉越絵』の絵師については、『呉越絵』が納められている箱の内側に「呉越ものがたり 傳 狩野長信筆」とある。伝承筆者の狩野長信は、江戸時代初期の狩野派の絵師として、寛永期に活躍したようである。『呉越絵』挿絵の絵師とすると、やや時期が早く、『呉越絵』の生成過程に関与したとは言い難い。」と述べたことがある前掲（注8）拙論。

- (13) 濱中修氏は天理大学図書館所蔵『舟のめとく』を対象として、『舟のめとく』の生成過程について詳細に論じられている（『舟のめとく』の形成）『室町物語論攷』三〇〇―三二五頁 一九九六年 新典社。また、阿部泰郎氏は、『舟のめとく』絵巻は、「船のくどくを讚美することを主題としており、この一節も『されは、もろこし、日のもと、かよひをこころよくさせらるることも、ふねなくては、そのかひあるまし』という文脈のなかで記されているのだが、その背後には、舞曲の物語において列挙される後の迎え船、龍頭鶴首の船、弘誓の船、飾り船、妻越船といった、船のイメージが強くはたらいっているように思える」（『大織冠』の成立）『幸若舞曲研究 第四卷』一五九―一六〇頁 三弥井書店 昭和六十年）と論究されている。

- (14) 國學院大學図書館所蔵『武家繁昌絵巻』（國學院大學創立百三十周年記念 國學院大學古典籍解題 中世散文文学篇）『三二〇』『武家繁昌絵巻』六〇二・三頁、平成二十六年二月 國學院大學。

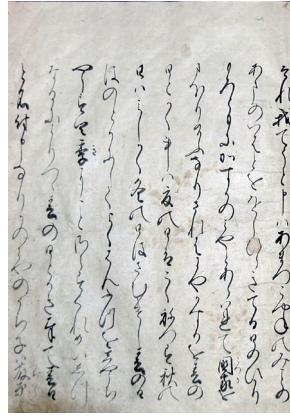
- (15) 國學院大學図書館所蔵『舟のめとく』冒頭の「神宮皇后譚は、竜宮城の「干珠・満珠」を核とする、『武家繁昌絵巻』・「住吉の本地」・「八幡大菩薩縁起」に展開する神功皇后譚の享受史の上に位置づけることはできるであろう」（國學院大學図書館所蔵『舟のめとく』と神功皇后譚）針本正行編『物語絵の世界』八七―一〇八頁、平成二十二年三月）と述べたことがある。

* 國學院大學図書館所蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、古山次長はじめ館員の方々に多大なご配慮をいただいた。

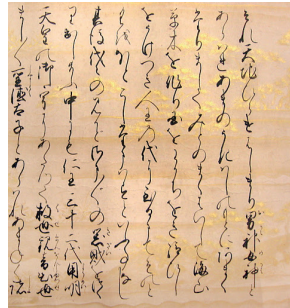
ここに御礼申し上げます。

《参考 『大織冠』(國本1) 詞書の書写者》

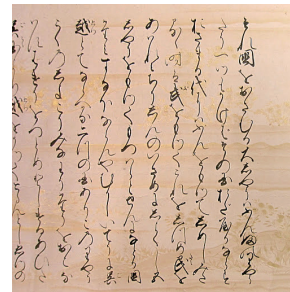
『大織冠』(國本1) 冒頭詞書



『舟のゐとく』 冒頭詞書



『呉越絵』 冒頭詞書



《参考図1 美人(竜女)が流木から顕現した場面》

『大織冠』(國本1)



『大織冠』(國本2)



『たいしよくくわん』(國本3)



《参考図2 鎌足が海女を助けようと海上で舞楽を催した場面》



『大織冠』（國本1）



『大織冠』（國本2）



『たいしよくくわん』（國本3）



『大織冠』（國本2）



《参考図3 鎌足らが海女の死を嘆いている場面》
『大織冠』（國本1）



『たいしよくくわん』（國本3）最終図 興福寺五重塔



『たいしよくくわん』（國本3）

《参考図4 『大織冠』 『舟のゐとく』 『呉越絵』の挿絵の構図比較》

『大織冠』（國本1）第15図



『舟のゐとく』上巻第1図



『呉越絵』上巻第1図



『大織冠』（國本1）翻刻本文

上卷

それ我てうと申はあまつこやねのみこと
 あまのいはとをしひらきてる日のひかり
 もろともにかすかのみやとあらはれて國家を
 まほり給ふなりされはにやかすかを春の
 日とかく事は夏の日はこくねつす秋の
 日はみしかく冬の日はさむけし春の日
 はのとかにしてよくはんふつをしやうち
 やうす四季きにことさらすくれめいしつ
 なるによりつ、春の日とかき奉て春日
 と名付申なりかのみやのうち子は藤原ふぢはら
 氏うぢにておはしますふちはらの其中に
 たいしよくわんと申はかまたりのしんの

(1丁オ)

御事なりはしめはもんしやうせうにて
 御座ありけるかいるかのしんをたいらけた
 いしよくわんななされさせ給ふそも此くわん
 と申は上代にためしなして末代に
 ありかたきくわんとなりけり是によつ
 てこのきみをはふひとつとも申いづも
 かまをもち給へはかまたりの

しんとも申す也

(1丁ウ)

春日のみやに

さんろうありて

あまたのくわんを

たてさせ

給ふ

(2丁オ)

第1回 鎌足ら一行、春日大社に参詣する

(2丁ウ・3丁オ)

中にもこうふくしのこんたうをさいしよ

に御こんりうあるへしとてしやうこん七ほう

をちりはめしやこんたうをたてさせ給ふくわ

ほうは天よりあまくたり國のなひきし

たかふ事はふるあめのこくとをうるほし

草葉の風になひくかことし君たちあ

またおはしますちやく女はくわうみやうくわ

うくうと申たてまつつてしやうむてん

わうのきさきにた、せ給ふ二女にあたり

給ふをこうはくによと名付て三國一の美^び

(3丁ウ)

人たりしかるにかのひめ君のゆふにやさし

き御かたちたとへをとるにためしなしかつら

のまゆはあをふして遠山ににほふかすみ

ににたりも、のこひあるまなさきはせき

やうにきりのまにゆみはり月の入ふせい

ひすいのかんさしはくろふしてなかければ

やなきのいとをはるかせのけつるふせる

にことならずすかたは三十二さうにしてなさ

けは天下にならひもなしか、るゆうなる

御かたちのいこくまでも聞えのありて七御門(4丁オ)

のそうわうたいそうくわうていはつた

へきこしめされて見ぬこひにあこかれ雲

のうへもかきくもり月のとも、をのつからひ

かりをうしなひ給ひけりしんかけいしやう

一とうにそうし申されけるやうはきよくた

いの御ふせるよのつねならすおかみ申て

候なにをかつ、ませ給ふへきおほしめさ

る、事のさうはちしんの中へせんしあ

れとそうし申されたりければ見かと

えいらんまし／＼てあらはつかしやつ、むに(4丁ウ)

たえぬ花のかのもれても人のさとりけるか

今はなにをかつ、むへきはよりとうかい

数千里日本ならのみやこにすむたいしよ

くわんかをとひめをかせのたよりにきく

からにみぬおもかけのたちそひてわすれ
もやらていか、せんしんかけいしやう承て
是はなによりもつてめてたき御所望

にて候物かなちよくしを立てりんけん
にてむかひとらせ給ひえいらんあれとのせん

きにてうんかと申つはものをちよくしに

(5丁オ)

たてさせ給ふうんかすてに太宗のきん
さつを給はり数千里のかいろをす

き日本ならのみやこにつきたいしよく
わんのみもとにててうさつをさ、く

たいしよくわんは

御らん

し

て

(5丁ウ)

第2図 唐の勅使、鎌足邸を訪問する

(6丁オ)

我はこれしちいきとて小國のわうのしんか

としいかにとしていこくの大わうをさう

なくむこにとるへきと一度はちよくしを

ちたいあるちよくしたちもとつて此むね

をそうもんすたいそういと、あこかれ二度

のちよくしをたてさせ給ふせうむくわう

ていきこしめしなさは上下によるへか

らす小國のしんかの子なりとも其は、

かりはあるへからすまるへんしやうをいた

すとてかたしけなくもくわうていのるん

はんをなされければちよくしめんほくほ

とこしていそきたちもとつてへんしやう

をさ、くれはたいそうおほきにえいり

よあり吉日えらひさう／＼むかひをそ

こされけるこんとのむかひのちよくしには

たちはなのあつそんに右大臣ほうけんなり

そもほんてうと申は小國なりとは申せとも

ち悉第一の國なりみれんのでて立かなふ

ましけつかうあれとのせんきにてむねと

(6丁ウ)

のたいせん三百そきさきの御舟をは
れうとうけきしうと名付てしゆつたん

(7丁オ)

をもつてかたとりへにはあふむのかしら

をまなひとにもいくしやくの尾をたれた

りふねのうちにしきをしきちんたん

をましへくわうようらんけいみかきたて玉

のはたは風になひきこかねのかはらは日に

ひかりくせいの船とも云つへしはつひ

てんくわんたまをたれ身をかざつたる

によくわん侍女三百人すくつて是はせん

ちうの御かいしやくのためにとてかさり

(7丁ウ)

船にそのせられたりけるしちいきよ

りももろこしまて数千万里の海上の

御なくさみの其そのためにおんかのまひ有

へしとてちこ百人すくつて身をかざつ

てそのせられたりすてに文月のすゑ

つかたともつなとひてをしいたすあまの

かはせにあらねともつまこしふねのほを

あけたりかくてなみかせしつかにて舟
はほんてう津の國やなんの浦につき

しかはちよくしはならの京につくたい

(8丁オ)

しよくわんはうけとりてひとつは異國の聞え

といひ又ひとつはほんてうのいくわうのため

そとおほしめされさんかいのちんくわを山

とつみ五千人の上下を其としの八月な

かはよりあくる卯月はしめまでもてなし

給ふたいしよくわんくわほうのほとめてた

さよ卯月もやうくすゑになりゆきけ

れは吉日をえらひ玉の御こしを奉りな

むはのうらへ御いてありそれよりもれう

とうけきしうにめされしゆんふうにほを

(8丁ウ)

あけければ舟はほとなくたいたうのみやう

しうの

みなとに

つかせ

給ふ

(9丁オ)

第3圖 紅白女、唐へ渡海する (9丁ウ・10丁オ)

たいにきこしめされてすはやこらむ
 のきやうけいよいよ御むかひに参らん
 とてひたりみきの大_ニ臣女くわんところ百
 くわんけいしやうくわんにんしちやうにいたる
 まてのころとほなかりけりそもく
 大國のくにのかすを申に一千四百四十國
 こほりのかすを申に九万八千余キくんでら
 のかすを申に一万二千六ヶ寺市の数
 を申に一万二千八百長安の市と申は
 さいけのかすは八百万間人の数を申に五
 十九オおく十万八千人たついちなり長安
 のみなどより十のみちわかてりけんろ
 けんなむたうとはたつみをさしてゆく道
 三十五にふみわけりおくなたうと申は
 ひつしるへゆくみち五十九にふみわけり

さいけいたうと申は西をさしてゆくみち

二十六にふみわけかうほくたうと申は

きたをさしてゆくみちすゑはたふたつ

とうやうたうは船路にてすゑは日本に

つ、けりか、るみちくよりもみつきもの (11丁オ)

をそなへきさきをおかみ奉るあらあり

かたやた、ひとめおかみ申人たにもひん

くをのかれたちまちにふつきの家と成

されはにやくわうていもれうかんにしたし

みなれちかつかせたまへはしよひやうを

いやしたちまちにやうしやうの太いにあ

へるこ、ちして御持の間世すなほに

たみのかまともゆたかなり (11丁ウ)

第4圖 太宗皇帝に入内した紅白女、功德を發揮する

くてうちすきゆくほとにきさきの (12丁オ)
 宮おほしめすわれはこれ小國のものと

ありなから大こくのきさきにそなはり
たるそのこうめいを日本にのこして

こそとおほしめし御ちゝの大しよくわんこ
うふくしのこんたうおなしきしやかの
れいさうを御こんりうあるへきに彼御
たうのせにうにふつくほうくをくつ

て末代のしるし共なさはやとおほし召
そろへ給ふたからにはまつくわけんけいし
ゆひんせきくわけんけいと申はうちならし
(12丁ウ)

ての其後にこゑさらになりやますと、
めんとおもふときには九てうのけさを
ほふなりしゆひんせきはすゝりかのすゝ
りのとくゆうは水なくしてすみをすつ
てこゝろのまゝにつかふなり梵ほんの
ほけきやうをたらようにてあなんそん
しやのあそはしたるしちしやうるりの
水かめしやくせんたんのけいたいへいるり
の花たてせんたんのけうそくにくたんしゆ

(13丁オ)

のしゆす一れんくわうこの鹿のかはこん
しきのしゝのかはくわそのかわ三まい

かゝるたからのその中にしやくせんたんの
みそきにて五寸のしやかをつくりたて
にくしきの御しやりを御しんに作りこめ

なからはう八寸のすいしやうのたうのうち
におさめてむけほうしゆと名付てこれを
一のてうほうにしてをくりふみをへつし
にかきいしのはこにおさめてをくらせ

給ひけるとかやこの玉はすなはちこう
(13丁ウ)

ふくしのほんそんしやかほとけのみけん
にえりはめ給ふへきなりと

かきこそをくり

たまひ

けれ

(14丁オ)

第5図 紅白女、興福寺本尊釈迦仏のために鎌足へ宝

珠を送る

(14丁ウ)

さてしもかゝるてうほうをたれかはしゆ
 こしてをくるへききりやうの人をえらめ
 とてつはものをめされるゝに大國のならひに
 て百人が大しやうを百こと名付千人が大
 しやうを千こといひ万人が大將を万こと
 名付けかうほく道のすゑうんしうと云
 國にまんこしやうくんうんそうとてたいか
 う一のつはものありをとらぬほどのつはも
 のを三百人あひそへみやこをたつて大唐
 のみやうしうのみなとより一葉の船にさほ
 をさしをひての風にほをあけて数千
 万里ををくりけるかいていにすみ給ふ
 八大りうわうのそうわうたまの日本
 へわたることをしんつうにてしろしめしもろ
 くのりうわうたちをあつめおほせら

れけるはわれらはすてにかいていのりう
 わうたりといへとも五すい三ねつひまも
 なくをつこうにもあひかたきしやくせん
 たんのみそきにて五寸のしやかのれい
 ふつの此なみの上に御さあるをいさ
 むはひ取てわれらしやうかくなるへしむ
 しかるへしとて八大りうわうのなみ風あ
 らくたて給へは舟ひようたうしちさんし
 なかみちしつかならさりきされともきと
 くふしきのほとけのめしたる御船なれ
 はしやうかいの天人は雲をしのきふつほう
 しゆこのやしやらせつはなみかせをしつ
 めさせたまへは舟にしさいはなくして
 みつはのそやをいることく殊更をひてと
 なりにけりりうわういと、いかりをなし
 なみかせにてと、めすはおさへてむは
 いとるへしさあらん時にいこくのものさた
 めてつよくふせくへしりうわうのけんそ

(15丁ウ)

(16丁オ)

くにしかるへきものはなししゆらはたけき
ものなれはたのふて見んとのたまいてあ
しゆらたちをそたのまれけるかのしゆら
の大しやうまけいしゆらもろ／＼のけんそ
くをひきくしてこそ出られけれどもと

よりこのむとうしやうなれは百千にやつ
かんのけんそくともをいきやういるるに出た、

(16丁ウ)

せほこたうちやうをとりもたせかたきは数万
き候ともいくさは家のものなれは玉にを
ひてはむはひとりてまいらせんと申て日
本と唐土のしほさかひちくらかおきに
ちんをとりまんこか舟をまぢるたり
是をはしらてまんこはしゆんふうにほを
あけこゝろにまかせてふかせゆくに日比
ありとも覚えぬところにしまひとつうかへ
り見ればはたあしひるかへしくろかね
のたてのあひよりもつるきやほこのい

(17丁オ)

なひかりたうちやうのかけともかうんかの
ことく見えければあれなにといへるしさい
そやいかなることのあるへきそとこゝろも
となくおもはれけれどもさあらぬ

ていにて

ふかせ

ゆく

に

(17丁ウ)

第6回 修羅軍、万戸將軍の船を待ち伏せする

(18丁オ)

かのしゆらの大将まけいしゆら一ちんにす、
み出天をひゝかす大をんにてたゝいま
此おきにせきをすへたるつはものをいか
なるものとおもふらんしゆらといへるものな
りかいていのりうわうたちをみつかんだ
めしいしゆをいかにとおほすらん御ふねに
ましますしやくせんたんのみそきにて五

寸のしやかのれいふつよのたからはほしからす
そのすいしやうのたますみやかにわたされ候へ

さらすは一人もとをすましいと申まんこ此 (18丁ウ)

よしきくよりもあらこと／＼のいきほ

ひさうやさてはをとにうけたまはるこのあし

ゆらたちにてましますすなわか大國の

ならひにて百人か大将を百こと名付くわん

人といふ千人か大将をせんこと名付てしゆ

りやうといひ万人か大将を万こと名つけ

しやうくとこれをいふなりかひ／＼しくは

なけれども一万人か大将なれはまんこ

しやうくんうんそうとはそれかしか事に

て候もつともりうくうよりの御所望に (19丁オ)

したかひて参らせたくは候へとも七御門のな

かよりもきりやうの人とえらまれ日本の

ちよくしを給はるときの日よりもして

命をは我きみのをんのためにたてま

つるされはめいのかるき事はこのぎに

よる事なれはいのちのあらんかきりは
玉にをゐてはとらるましいそけにと

たまかほしくは万子をうつてとれやと

てから／＼とそわらひけるしゆら共この

よしきくよりもさらは手なみを見せん

とてつちやうらんはのつるき^{ママ}をひつ

さけうんかのことくせめかゝるまんこそを

見てかなふへきやうあらされはふなそこ

につつと入てしやうそくをそきたりける

万子か其日のしやうそくにしんつうゆけ

のうてかねさはんやかんのすねあてし

めうほうれんけのつなぬきはきにんに

くしひのよろひをくさすりなかにき

くたしてあのくたら三みやく三ほたいの五

枚かふとをゐくひにきしのひのを、そ

しめたりけるかうまりけんの大かたな

真^ま十もんしにさすま、に大たうれんと

いふつるきあしをなかにむすんでさけ

(20丁オ)

(19丁ウ)

けんみやうれんといふほこもつて舟のへ
いたにつつたちあかる百三人のつはもの
ともおもひくに出立てはしふねおろし
をしうかへすてにかけんとしたりけり
たうのいくさのならひにてみたんにかくる
事はなしてうしをとつてかくをうつて

(20丁ウ)

ひやうしにあはせかけひくせいそろへのた
いこはらんしよくしよつてうしかけよと
うつたいこはさそうくとうつなりひけ
よとうつたいこはおんてうこつとうつ也
くんでくひをとれとはつるてうこつとう
つなりかなはぬときのせんにはしはうて
つはうはなしみたれひやうしきりひやうし
きうにをよふ時には血ちをはた於たきとなか
してかうへをつかにつめよとうつしゆら
たう人のた、かひはむかしも今もためし
なしそのうへしゆらかた、かひにくわえん
の雨をふらしあくふうをふきとはせはん

(21丁オ)

しやくをふらする事は雪のはなのちること
くつるきをとほせほこをなけとくの

矢をはなす事まなこをまくかことし

身をかくさんとおもふときけしの中へわ

けていりあらはれんとおもふ時しゆみに

もたけをくらふへしかゝるしんつうめいよ

をまのまへにけんしこゝをせんと、た、かへ

はすてにはやたう人こゝろはたけく

いさめともこのいきほひにをされての

(21丁ウ)

かれかたくそ

みえに

ける

(22丁オ)

〔白紙〕

(22丁ウ)

さるあひたまんこはみかたのくんひやうと
もをちかつけてとてもかなはぬ物なら
はしゆらか大将四五人そのみくつと

なしてこそいこくのきこえもしかるへけ
 れわれとおもはん人々はともをしてたへ
 やとてこんかうかいのまんだらたいさうかいの
 まんだらりやうかいしよそん一千二百余よそん
 のまんだらほろにかけてふきそらしふ
 なそこよりも名馬ともそのかすあまた
 ひきいたすまんこかひさうの名馬にしん
 つうあしけと名付て七き八ふんあけ六
 さいをかみあくまであつうしてをつさま
 むかふよこはたはりをくちそうとうつ
 まねのくさりし、あひほねなみよめ
 ふしあふつくりつけたることくなりらん
 てんのくらををきしよつかうのにしきの
 上敷にこん／＼ぬつたるるりのあふみりき
 しゆのちからかははしやう／＼のちにて
 そめたりけりおなしきおもかひをかけ
 させこかねのくつはかんしとかませにし
 きのたつなゑつてかけ万子ゆらりとう

(23丁ウ)

ち乗てなみにしつまぬうくくつを四
 つのあしにかけたれはなみのうへをはしる
 事はへいろをつたふことくなり三百よ人
 のつはものともいつれも馬にのつたれ共
 みな／＼うくくつかけたれはくもゐにかり
 のとふやうに一むらかりにさつとちらしゆ
 らかちんへ切て入しゆらとも是を見て一疋
 二ひきのみならず三百疋のむまともかいつ
 れもなみをはしる事はふしきなりと
 きもをけしかほとにいさむしゆらとも、
 にけまなこにそなりたりける大将の
 うしあしゆらす、み出ていひけるはなふこ、
 さうそかねてより申せしことのちは
 ぬなふめたれかほのすくやかしおもてかほ
 くせめにすみたていらむあらそひあらかふ
 義にはにましき事にて候そや手をく
 たかてはいかにとしてかうみやうふかくか
 見えはこそ一かせんせんとて出立たりし

(24丁オ)

ありさまはあくこうしむいのよろひを
(24丁ウ)

むみやうけんこのかふとのををしめとう
しやうむさんのほこつゐてしんいくちの
はたさ、せ百せんにやつかんのけんそく共
をあひしたかへしきりにときをつくれは
へきてんやふれはしやうにおちかいてい
をうこかしなみをあけこくうさなからか
とうようして月のひかりもうつもれ
てひとへにちやうやとなりたりけり

このほと音にうけたまはるまんこしやうくん
うんそうに見參をせんといふま、に万子
を中にとりこめたり万子かつはものと
(25丁オ)

もこ、をせむと、切たりけりらこあしゆ
ら三百人からこんらあしゆら五百人手を
くたいてそきつたりけるまんこはめいよ
のむまのり海のうへにてのるたつなさう
かいふとりうはいふのりうかめたるむま
のあしゆんでのものをつくときあふき

やうのたつなきつとひくめてのものをつ

くときにふきやうのむちをちやうとう
つにくるものをふとときにはせんきや
(25丁ウ)

うあをりのあふみのむちをきよくしん
たいに乘たりけり西から東へうつてとを
るときには三百余人かあとに付て爰を
せんと、きりたりけりいれかへくた
たかへはしゆらかいくさはこたれか、つて
かなふつへしとも見えさりけりそう大
將のまけいしゆら八めんはつひをふり立
て八つしたのほこをうちふり討死こ、
なりとおめきさけんてかけにけり
(26丁オ)

第7図 万戸將軍と修羅軍、合戦をする

(26丁ウ・27丁オ)

まんこ是を見てかなふへきやうあらさ
れはうしほをむすひてうすとししよ
てんにふかくきせいするしかるへくはくわん

せをんひくわんたかへ給ふなふくんしん
 ちうねひくわんをんりきしおんしつたい
 さんちかひいまならてはしゆらかおそる、
 けまんのはたをた、さしかけよいやさし
 かけよとけちすればけまらんはうたま
 のはたをまつさきにさ、せ我をとらしと
 せめか、る万子かつはもの、かつに乗てをつ(27丁ウ)
 ふせく切たりけりしんりきもつきは
 てつうりきひきやうもかなはずしそこ
 のみくつとなりけりいきのこるしゆら
 ともすみかくにかくれたりまんこかちと
 きつくりかけもとの船にとりのりしゆ
 らたうしんのた、かひにかちぬやくと
 いさみをなしたうとかうらいはしり
 すき日本ちかふそなりにけるさるあ
 ひたりうわうたちこれをはさていか、
 はせんとせんきせられけり其中にとつ
 てもなんたりうわうのたまはくそれ人
 (28丁オ)

けんのちゑをたはからんにはみめよき女
 によもしかし爰をもつてあんするに龍
 女をもつてこの玉をたはかつてとるへ
 きなりりうくうのをとひめにこひさい
 によと申てならひなきひしんたりし
 をみめいつくしくかさりたてうつほ舟
 につくりこめ波のうへにをしあくる是を
 しらてまんこしゆんふうにほをあげこ、ろ
 にまかせふかせゆくにかいまんくとして
 は又はしやうち、むたりへきてんのおき
 ぬく風くわうくとしてはいつれのおき
 さうにかこゑやとさんかしらなしおほか
 はらきとのしまもろみのしまもめい嶋
 まさつまの國にきかいかしまゆきのも
 たりつしまのないことゆへなくはしり
 すき九國の地をは弓手に見てさぬき
 の國に聞えたるふさ、きのおきを
 をりけりなかれ木一本うかんてあり
 (28丁ウ)

すいしゆかちとりこれをみてこのほどの
 大風にてんちくたうとのちんかうはし
 ふかれてなかるゝやらんと人々あやしめた
 りければ万子此よしきくよりもなんのあや
 しめ事そたゝとりあけよとけちをな
 す御ちやうにしたかひはしふねおろしと
 りみるにちんかうにてはなしあやしやわつ
 て見よとて此木をわつて見るになに
 とことはにのへかたきひしん一人おはしま
 すすいしゆかんとりこれを見てをのまさ
 かりをなけすてゝてあつとはかり申万子
 此よしみるよりもいかやうにも御身はてん
 まはしゆんのけゝんにてしやうけをなさむ
 そのためなあやしやかにかにといひけれと何
 と物をはいはすして只なみたくみたる
 はかりなりまんこかさねていひけるはい
 や何とたるませ給ふともせひにつけて
 おほつかなしたゝかいていにしつめみ

くつになせといさみをなせはあらけな
 きつはもの御てにすかりうみへいれむ
 とすりう女はいとゝあこかれてあらうらめし(30丁オ)
 の人のことはや野にふし山を家とするこ
 らうやかんのたくひたにもなさけは有
 とこそきけみつからと申はけいたんこくの
 大わうのいつきのひめにてさふらふなる
 かあるきさきのさんによりうつほふねに
 つくりこめさうは万里へなかさるゝたま
 くゝきとくふしきにしんりんにあひたれ
 はざりともとこそおもひしになにのつみ
 にうきかいていにしつむへきそうらめし
 さよとかきくとくみたれかみをつたひ
 涙のつゆのこほるゝはつらぬくたまのこと
 くなりしもをおひたるをみなへし下葉
 しほるゝふせいしせいしかやさうにすてられ
 てひしきものにはそてしぬれほす
 日もなしろわひけるも今こそ

第8図 流木から顕現した美人、万戸將軍に自らの来

歴を語る

(31丁ウ)

おもひ

しられ

たれ

(31丁オ)

かつらをかきしまゆすみはちすをふくむ
 くちひるも、のこひますあひきやうなみ
 と涙にうちぬれものおもふ人のふせゐかや
 うちむつけたる御ありさまそのみるめ
 もいたはしやさしもかしこき万とは
 申せともやかてたるまかされけに／＼そ
 れはさぞあるらんそれ／＼とうせん申
 せとおなしふねにのするりうわうの
 わさなれはむかふさまに風ふきてふさ、き
 のおきに十日はかりとうりうすさ
 なきたにりよはくはことにものうきに

(32丁オ)

まんこあまりにたえかねて風のたよりに
 かよひきていねかりそめのうた、ねはなに
 となるこのをとたかくよにもすゝめのす
 みうきにおとろかさんかいたはしさにあ
 ふきのかせをいさめつ、月てうさんにかく
 れあれはあふきをあげて是をたとへ風
 たいきよにやみぬれは木をうこかして
 これををしゆあひみる人をこふるにはふみ
 かよはねとこうるならひきみかこゝろを
 とりにくるなふいかに／＼とおとろかす
 りう女はもとよりねもいらすさりながら
 うた、ね入たる風情にてたそや夢みる
 おりからにうつ、ともなきことの葉はゆめ
 のうきよのあたなれは人のことはも頼
 まれすよのまにかはるあすか河みつほ
 のあはのかりそめに風にきえぬることの
 はのすゑもとをらぬものゆへにあた名立て
 はなにかせん中／＼人にははしめよりとは

(32丁ウ)

れぬはうらみあらはこそ其うへわれは生
れてより此かたかいもんをあやまたす

(33丁オ)

むかしよりいまにいたるまでおほくの
生をうけし事あるひは六よく四生にむま
れ五すい八くのをうけあるひは三つしやく
におちしたひもつのひにあへりかゝるさいこ
うをふりいま人間とむまるゝ事もかいら
きによつてなり第一せつしやくかいをた
もつては心のさうと成ちうたうかいをたも
つてかんのさうと成しやいんかいをたもつ
てひのさうとなるまうこかいを持てはい
のさうとなるおんしゆかいをたもつては
しんのさうと是なる是に五音しつせい
ありいはゆるさうしやくかくちうそうわう
ひやうはんいちこつこれ又みめうの御のり
としこちのおんせいはなりこれに五つ
のたましゐありこんしはくいしむなり
き此五つのかたちをくそくするを佛と

申五のかたちかけぬれはくちあんへい
のちくるいたりいかにも佛をねかはんす

(34丁オ)

る人は先五かいをよくたもつへしひとつも
かいをやふりなはむそくたそくの者と
成てなかくほとけになるましおほせば
をもくさふらへと第三のかいもんをいかにとし
てやふらんとなみたくみたるはかりに
ておもひ入てそおはしけるまんこもたい
たうそたち佛法るふのくになれはあらく
かたり申あらしゆせうや扱はこしやうの御た
めにきんかいをたもたせ給ふかそのかいもん
の中に六はらみつのきやうあり其中にとつ
てもにんにくはらみつとは人のこゝろをやふら
やふりなは佛とさらになりかたしされはに
や佛には三みやう六つうおはしますこれはひ
とへにくわこにしてしよはらみつをき
やうせしくとく今にあらはれて

(34丁ウ)

佛となり

給へる

(35丁オ)

第9図 万戸將軍、仏法問答をする中、竜女に懸想を

する

(35丁ウ)

たとひ一度は瀧の水にこりてすまぬ
物なりとつゐにはすみてきよからん

こひには人のしなぬかさでもむなしく

こひしなは一ねん五百しやうけんねんむ

りやうこう生、せ、の間につきせぬう

らみのふかふしてともにしやしんとなる

ならば佛とはならずしてしやたうにな

かくおつへしかいのしなあまたあり又

五かいをよくたもつては人間とむまれ

て五駄をうくる也十かいをたもつては

天人と生れて五すいをうくるなり二

百五十かいは又しやうもんとむまれて佛

(36丁オ)

にはなりかたし五百かいたもつてはえん
かくと是なるこれも佛にえならすほさ

つさんしゆ一しんかい此かいたもつてや

かてほさつとなりつ、仏とさらになり

かたし大せうえんとんかいこのかいたを

もつてはやかて佛になるなり大せうの

かいきやうは二ねんをつかぬかいなりしん

たいはむさうにて我身もとよりしくう

なり生死にもつなかれすねはんにも更

にちうせすしやしやうすなはちきよけれ

はす、くへきあかもなしいとふへきほん

なうなしねかひてきたる佛なしみる

一ねんをほとしきくことを御のりとす

こ、をしらぬをまよひとすゑんようふた

つ和合のみちいもせふうふのなからへこ

れ佛法のみなもとおろかにおもふへからす

御なひきあれやとおもふいかにくんと

申けるりう女はきこしめされてそれは

(37丁オ)

(36丁ウ)

ほつしんの御のりとしふつほうにをゐて
 はひさうのところなれともねかふ事なくし
 てはほとけとさらに成かたし上代はきも
 上こんにしてちゑも大ちゑなるへし末
 世の今は下こんにてちゑある人もすくなし
 むかし上代の大ちゑの人たにも家を出て
 妻子をすて法のためになんきやうす
 しちた太子はかうゐなる万乗のくらゐ
 をふりすてわりなくちきりふかゝりき
 やしゆたらによをよそに見十九にて出
 家をとけたんとくせんのほうれいあらゝ
 せんにんを師と頼わしのみやまのれい
 ほうにたき木をこり身をこかしせんこく
 にむすふあかの水こほりのひまをくむた
 ひになんたはそてのつらゝとなるよるは
 又よもすからせんにんのゆかのうへにし
 座せんのとこのふとんとなりかゝるしん
 くのこうをつみまさしくしやかとなり

(37丁ウ)

給ひ三かいのとくそんししやうのゑことまし
 く／＼て一大しやうけうをときひろめ給ふ
 なりこゝをもつてあんするにほんなう
 そくほたいしん生死そくねはんとてさ
 いしをたいしさふらひて佛とやすく成
 ならばなとやたいししやくそんはわうの
 くらゐをふりすてゝきさきをいと給
 ひけりそのほかしようくわのらかんたち
 いづれかさしいしをたいしてほとけとなり
 し人やあるさても佛の御をとゝなんだ
 太子と申せしはしつけほんなうつきす
 して女人をこのみ給ひしをかくては佛に
 ならしとてほとけはうへんめくらして
 しやうとちこくのありさまをそくしんに
 みせたてまつりつゐに出家とけさせて
 なんだひくとそなし給ふいとゝこのむしや
 きやうをよしとをしへ給ふはまうもくに悪
 きみちをしゆるふせゐなるへしかやうに

(38丁ウ)

申せはとてもとより我は佛にてあるな

りこくう一しやうとう一駄かしらは薬師やくし

み、はなはあみたむねはみろくはらはしやか

こしは大日如来なりそのほか十方のしよ
(39丁オ)

ふつたちもろ／＼のほさつとしわかたいに

くそくして方のこくうにほうによとして

おはします来もせずさりもせずいつも

たえせずましますをほつしん佛と申

形をつくりあらはししやうとを立てすみ

かとし給ふをほうしんふつと申なり八相

成道したまひて法をときすなはち衆

生をりやくしたまふを應身仏と申也

三身をとりわき一しむをしんするはさと

りのまへの佛なり三しん一そくとくわんし
(39丁ウ)

いつれをもしんするをさとりのまへと申

佛とならんそのためなんきやうくきやう

せんものいかてせんあくみたるへき身はいた

つらになざる、とかなふましとそ

おほせける
(40丁オ)

第10図 童女、万戸將軍と仏法問答をする中、反論を

する
(40丁ウ)

まんこ此よしきくよりもことのほかには

らをたていかによいかにきこしめせ佛を

ねかふ人はみなたうとちゑとしひしん

ひとつかけてもなりかたしたうといつは

きやうたいちゑといつはさとりのしんし

ひとつは一さいのしゆしやうをふかくあ

はれみて人のこゝろにしたかへり第一し

ひのかけては佛とさらになりかたしあふ

しよせんものを申せはこそ言葉もおほ

くつくれいまはものを申ましかくて
(41丁オ)

こゝにひれふしおもひしにとなりて此

よのちきりこそあさくともちこくかき

ちくしやうしゆらにんてんにむまれかはりし

にかはり六道四しやうの其中をくるりく
とをひめくつてうさもつらさをものちの

よにおもひしらせ申さんと其後ものを

いはすりうによはもとよりかやうにめ

されんためたはかりすまさせ給ひ玉

をのへたる御てにてまんこかたもとを

ひかへさせ給ひなふいかいたふなうらみ (41丁ウ)

給ひそよまことに心さしのましまさは

みつからしよもうをかなへてたへくさのま

くらのうた、ねのつゆのなさけは夢は

かりちきりなむまんこあまりのうれ

しさにかつはとをきて身をいたき

なふこはまことにて御座候かふたつ

となき命をもまいらせむと申りう女

はきこしめされていやそれまでも

さふらはすけにやらんうけたまはれは

しやくせんたんのみそきにて五寸のしやか (42丁オ)

のれいふつのましますよしを此ふな

うちにてうけたまはるそのすいしやうの

たまみつからに一夜あつけさせ給へと

もかくもおほせにしたかふへしといふ

まんこ此よしきくよりもあらしやうたい

なやちよのしよもうとこそおもひしに此

すいしやうの玉にをひては中くおもひも

よらぬ事なりとふつつとおもひきり

けるかいやく／＼なほとの事のあるへき

そとおもひなをしさてもく御身は何

として御そんし候ひけるそやさしくも

御しよもふ候ものかなさらはそつとおかま

せ申さんとてくろかねしやうをさしるん

はんをもつてふうしたる石のからうと

のうちよりもすいしやうの玉をとりいた

しりう女のかたへわたすけいせいと書

てはみやこかたふくとよまれしも今こそ

おもひしられたれかくてしうあひれんほ

のわりなきちきりと見えつるか三日も

(42丁ウ)

すきざるにかきけすやうにうせぬ玉は
いと人にみせければ
(43丁オ)

とりてうせぬと

申 (43丁ウ)

第11図 竜女、万戸將軍を欺き、水晶の玉を奪つて海
に入る
(44丁オ)

た、ほうせんとあきればてこくうに手
をこそたんとくすれあらくちおしや
りうくうのみやこよりたはかりけるを
しらすしてとられける事のむねんさ
よさりなからとかふ申をおよはずと
てのこるたからをさきとしていそぎ都
にのほりさま／＼のほうふつをとりいたし
てたいしよくわんにまいらせあくるといしよ
くわんは御覽してをくりふみの其中
に第一のたからものすいしやうの玉の見え
(44丁ウ)

ぬはいかにとたつねとひ給ふつ、むへき
にてあらされは

ありのまゝに

申あくると (45丁オ)

第12図 万戸將軍、鎌足に水晶の玉以外の宝物を献上
する
(45丁ウ)

かまたり聞召れてあまりおもへはむねん
なるにせめてわれをくそくしその浦の
ありさまを見せよとおほせければうけ
たまはると申てもとの舟にのせ申
ふさ、きのおきへをし出して爰なりと
申た、ほう／＼としたるなみのうへを
御らんしてむなしくもとり給ふ道す
からおほしめすさもあれむねんなるも
のかな三國一のてうほうをわかてうの
たからとなさすしていたつらにりう
(46丁オ)

くうのたからとなしけんくちおしきよ
 よくくものをあんするにりうくうかい
 は六道にをひてもちくしやうたうのうち人
 間のちゑにははるかにをとるへきものを
 さあらん時はなにとしてたはかられけん
 ふしきさよわれ又せんけうほうへんし
 いかにもあんをめくらしこの玉にをひて
 はとらふすものとおほしめしみやこにかへり
 たまひて朝夕あんをめくらし玉をとる
 へきはかりことくふうましくけれ共
 さすかかいちうへた、つてたしうゑん
 たうならされは舟のかよひちあらはこそ
 しかりとは申せともしんそくにをゐて
 をやたいせ太子はかたしけなくもによい
 の玉をとらんとてゑんしのかひをもつ
 てちよつかいをはかりつくしつ、つゐに
 はうしゆ得たまへり大きくわんとしては又
 つゐにむなしき事あらしわれもちかひ

(46丁ウ)

てねかはくはしやうくせ、のあひたにこの
 玉にをひてはとらふすものとおほしめし
 みやこのうちをしのひ出かたちをやつし
 たまひ又ふさ、きへ

くたらる、

(47丁ウ)

第13回 鎌足、水晶の玉を取り戻そうと房崎に下向し
 海女に出会う

(48丁オ)

〔白紙〕

(48丁ウ)

かのうらにつき給ひ浦のけしきを見た
 まふにあまともおほくあつまりてかつ
 きする事おひた、しくかのあまの中
 にとしのよはひはたちはかりに見えみ
 めかたちしんしやうなるかるすいにもつれ
 てあそふ事た、へいろをつたふこと
 くなりかまたり見こめ給ひてかのあま

のとまやにやとをかり日かすを、くら
せ給ひけるにあまにもいまたつまもなし
かまたりたひのひとりねのともさひし
き事なからこゝにて日をやかさねけん

(49丁オ)

ねかたけれどもひめまつのはやうら風に
うちなひきなにはもつらき浦なからそ
よよしあしと云かたりて二人あれはそ
なくさみぬうきねのこのかちまくら
なみのよるにもなりぬれはとも、なき
さのさよちとりふきしほりたるうらかせ
にこゑをくらふるなみのをとすさきの
まつにさきあれは木すゑをなみのこ
ゆるに似てしほやのけふり一むすひす
ゑはかすみにきえにほひ夢路に似たる
うたかたのなみのこしふねかすかにてか
らろのをとのをければはなになくね
のかりかねわれもみやこのこひしさにこゑ
をくらへてなくはかりうき身なからもま

きのをあげぬくれぬとすきゆけは
三とせになるは

ほともなし

(50丁オ)

第14図 鎌足、海女と契り、子供と暮らす (50丁ウ)

かくて男女のなからへわりなきなかの
ちきりにやわかきみ出来給ふいまはた
かひになに事もうちとけたりしいろ
見えたりかまたり見こめ給ひていまは
なにをかつ、むへきわれこそみやこに
かくれもなきたいしよくわんとは我事なり
こゝろにふかきのそみのありてこのほと
これにありつるそしかるへくはみつからか
しよもうをかなへてたひてんやあま
うけたまはりなふこはまことにて御座さ
ふらふかあらはつかしや四かいに御名かく
れもなきかゝる貴人にしたしみ申け

(51丁オ)

る事よひとつはみやうかつきぬへし又は
 はくちよ下賤にてはたへはなみのあらひそ
 たちるはいそのなかれ木こゑはあらひそ
 にくたくるうつせなみの音かみはやしほ
 にひきみたすつくものことくなる事にて
 みやこのくものうへ人にをきふしひとつとこ
 にして見えぬこそはつかしけれしかし
 只身をなけてしなんとこそはくととき
 れかまたり聞召れてとても死せんい
 のちを我ためにあたへりうかうかいへわ
 け入てたつぬるたまのありところをみ
 てかへれとの御ちやうなりあまひと承て
 りうかうかいとやらんはありとは聞いてい
 また見すゆきてかへらん事かたかるへし
 たとひいかなるおほせなりともいかてか
 そむき申へきとかまたりにいとまをこ
 ひ一えうのふねにさほをさしおきをさ
 してこき出なみまをわけてつと

(51丁ウ)

(52丁オ)

いり一日にもあからす二日にもあからす
 三日四日もはやすきて七日にこそなり
 にけれかまたりおほせけるやうはあらむさん
 やかの者は魚のゑしきともなりけるかあ
 やしやいかにおほづかなしとこゝろをつ
 くさせ給ふ所によみかへりたるふせる
 にもとのふねにそあかりけるいかにと
 とはせたまへはしはしは物を申さすや、
 有て申けるはなふこのとよりりうかう
 かいへゆくみちは事もなゝめの事ならず
 ひとつのかしらをさきとしてくらき
 ところをまほつてちいろのそこへわけ
 いるにうしほのるすいつきぬれはく
 れなるの色の水そあるなをしそこへ
 わけ入にこかねのはまちにおちつく五し
 きのれんけをひふしあをきくちなう
 おほくしてれんけのこしをまとへり
 なをしさきを見わたすにれい河きよ

(52丁ウ)

くなかれみつのいろは五しきにしてさう
 かんたかくそはたてり河にひとつのはし
 あり七ほうをちりはめ玉のはたほこ立
 ならへかせにまかせてへうようすかのほ
 しをわたるにあしすさましくきもき
 え夢うつゝともわきまへすなをしさき
 を見わたすにろうもん雲にさしはさ
 みたまのまくさはかすみのうちこかね
 のかはらは日にひかりさうてんまてもかゝ
 やけり三重のくわいらうに四重のもの
 をたてたる一つの大きおはしますりう
 くうしやうこれなりけりへいるりのはしら
 をたてめなうのゆきけたにはりのかべ
 を入にけり四しゆのまんしゆのやうらくた
 まのすたれをかけならへちやうにもあやをか
 けつゝとこににしきのしとねをしきち
 むたんをましへなをらんけいのみかき立
 かゝるめてたききうたかくにしやかつら

(53丁オ)

りうわうはしめとしてわしきりうに
 いたるまてほう座をかさり座せらるゝ
 もろ／＼の小りうとくりうこかねのよろ
 ひかふとを着て四つの門をまほれり
 扱もたつぬる玉をはへちにてんをつく
 つてたからのほたをたてならへかうをもち
 はなをつみ二六時中にはんのおりい
 ねうかつかう中々に申に及はさりけり
 八人のりうわう時々刻々にしゆこすれは
 このたまをとらん事今生にてはかなふ
 ましまして未来

(54丁オ)

て

とりかたし

おほし

めし

きり

(54丁ウ)

たまへ

わかきみとそ

申ける

(55丁オ)

第15図 水晶の玉を探しに向かった海女、鎌足に竜宮

城の様子を語る

(55丁ウ・56丁オ)

かまたりきこしめされてさては玉のあり
 ところをたしかに見をきつるものかな有
 とたにもおもひなはとりえん事はけつ
 ちやうなりりうともはかりことをめくらし
 たはかつてとりたれはわれもたくみ
 をめくらしはかつてとるへきなりそ
 れりうしんと申は五すい三ねつひまも
 なくくるしみおほき御身なり此くる
 しみをまぬかる事はしらへのをとによ
 もしかし爰をもつてあんするにりう
 わうをたはかるならば舞とくわけんに
 てたはかるへしこのうみのおもてにくく
 らくしやうとをまなひ玉のはたほこ百な

(56丁ウ)

かれ立ならへさて又かく屋をさうにかさつ
 て左右のけんくわんをしらへすましそのみ
 きりに見めよきちこそそるへをんかく
 をそうするほとならばた、天人に似たる
 へしさあらん時に大僧正からりんをうち
 ならし上てん下かいのりうしんをおとろ
 かしくわんしやうするならばすゝめによつて(57丁オ)
 神ほとけのそみらいりんましまさはり
 うくうのみやこより八たりうわうをさき
 としてそこはこのけんそく共をひきくし
 ていてらるへしそのあひたはりうくうかい
 にりう一人もあるましきそるすの間を
 うか、つてそろりと入てぬすみとつてやあ
 たへかしとそおほせけるあま承るあ
 らゆ、しのきみの御たくみやさふらふかゝる
 せんけうなくしてはいかてたやすくと
 りえななた、しるすの間なりともた
 まのけいこはあるへしたとひむなしく

(57丁ウ)

なるとも玉ををひてはしさいなくとり
あけきみにまいらすへきかもしもむな
しくなるならばまたたらちうのみとり
子のちふさをはなる、事もなしきみ

ならてはのちの世をあはれむ人のある
へきかとしてなくよりほかの事はなしか
またり聞召れて心やすくおもへもしも
むなしくなるならばけうやうのそのた
めにならのみやこに大からんをこんりうすへし

(58丁オ)

又此わかをひてはいましたようちなりと
いふともみやこへくそくし天下の御めにか
けふさ、きの大臣とかうし藤原のとうりや
うたるへきよしをこま／＼とのたまへは
あま承てよろこふ事はかきりなし
やかてみやこへししやをたて舞ぬしをめし
くたしあたりのうらのふねをよせしゆ
たんをもつていろとれるふたいをこそは

りたてけれ十丈のはたほこ百なかれた
てならへかせにまかせてひるかへせはさうかい

(58丁ウ)

はやかてしやうと、なりひたりみきのかく
やにかさりたてたる大たいこまんまく
をあけさせしゆれんに玉のすたれをかけ
ほう座をさうにかさつてうけむちとく
の大そうしやうからりんをうちならし上
てん下かいのりうしんをおとろかししやう
すれば八大りうわうしゆらいしてせん
きまち／＼なりけりなんせんふしうふさ
崎のうらにしてほう座をかさりちうしやう
あるいさやらいりんやうかう成てちやうもむ(59丁オ)

そこはこの

けんそく共をひきくして

こそ

出られ

けれ

すてにりうしん

出たまへは

國中の

ちこたち

身をかさり

まうけ

こゝを

せんと、

まひ給ふ

た、天人の

ことく

なり

(60丁オ)

第16回 鎌足、海女を助けようと海上で舞樂を催す

さるほどに龍神五すい三ねつたちま

ちまぬかれ給ひけるあひたなに事もうち

(60丁ウ・61丁オ)

わすれ舞に見とれ給ひてふさ、きに日をそ

をくらるゝすはやひまこそよけれとて

あまもいてたちをそかまへける五しき

のあやをもつて身をまとひ夜光の玉

をひたいにあてかねよきかたなわきは

さみぬのつなのはしをこしにつけなみ

まをわけてつつと入たとひ男子の身な

りとも一人うみにいらん事とくの魚りう

かめ大しやのをそれもあるへきに申さんや

女の身と有て一人うみへいる事はたくひ

すくなきこゝろかな数千里のかいろを

すきりうくうのみやこにつく夜光の

玉にてらされてくらきところはなかり

けり殊更見をきたりし事なれば

まよふへきにてさふらはすりうくうの

ほうてんにあかめをくすいしやうの玉お

もひのまゝにぬすみ取てこしに付け

たるやくそくのぬのつなをひけはせん

(62丁オ)

(61丁ウ)

ちうの人々あはややくそくこ、なりと
 手てにつなをくりあくるあまもいさ
 みてかつけはうへよりいと、ひきにけり
 今はかうと見えしところに玉をまほれ
 るりうこのよしを見つけあとをもとめ
 てをふ事はた、三つはのそやをいるこ
 ことくせんちうの人々あはやほのかに見
 ゆるはくりあけよとけちするにあまの
 あとにつゐてひとつの大しやをふてくる
 たけは十ちやうはかりにてひれにつるき
 をはさみたてまなこはた、夕日のみ
 つにうつろふことくなりくれなゐのこ
 とくなるしたのさきをふりたてすき
 まなくをつかくるあまかなはしとおもひ
 けるあひたかたなをぬいてふせきけ
 りせんちうの人々このよしを御らんし
 手をあかき身をいたきおつつふひ
 つころんつあはや／＼とおほせけるかま

(62丁ウ)

たり御らんしきよけんをぬきようち
 のとききつねのあたへたひたる一つ
 のかまにとりそへとんていらんとし給ふ
 を船中の人々ゆん手めてにすかつ
 てこはいかにとて

と、めけり

(63丁ウ)

第17図 竜王、逃げる海女を追いかける

(64丁オ)

すてにはやこのつなのこりすくなく見
 えしとき大しやはしりか、つてなき
 けなくもかのあまの二つのあしをけち
 きれはみつのあはとそきえにけるむな
 しきしかいをひきあけ諸人の中に
 これを、き一度にわつとさけふかま
 たり御らんして玉はとりえぬものゆ
 へに二世のきゑんはつきはてぬむね
 のあひたにきすあり大しやのさけるの

みならずとあやしめ御らんありければ
 このきすの中よりもすいしやうの玉いて
 させ給ふさては大しやのをつかけしとき
 かたなをふると見えしはふせかんためにな
 くしたまをかくさんそのためにかか身
 をかいしけるかとよせめてこのきすを
 わか身すこしおひたらはかほとにものは
 おもふましきを女ははかなきありさま
 かな男のめいそむかしてとていのちを
 すつるはかなさよともし火にきゆるよ
 るのむしはつまゆへその身をこかすなり
 ふえによるあきのしかははかなきちき
 りに命をうしなふそれはみなくしうあ
 ひれんほのわりなきちきりとは云なから
 かゝるあはれはまれなるへしわれには二世
 のきゑんなれは又こん世にもあひ見な
 むなんちはいまこそかきりなれわか
 のすかたをよく見よとて

御なけきは

かきり

なし

第18回 鎌足ら、海女の死を嘆く

(66丁オ)

いとけなきわかきみをしかいにをしそへ
 たりければし、たるおやとしらぬ子のこ
 のほと母にはなれつ、たまにあふたる
 うれしさにむなしきちふさをふくみつ、
 は、のむねをた、くをみて上下はんみん
 をしなへてみななみたをそなかしける
 あまはむなく成たれとかしこきせん
 けうはうへんによりりうくうかいへむは
 われしむけほうしゆをことゆへなくむはい
 返し給ふ事ありかたしとも中くしに申
 にをよはさりけりこのたまはずなはち
 をくりふみにまかせこうふくしのほんそん

(66丁ウ)

しやかほとけのみけんにえりはめ給ひける
とかやしやうしんのれいさうしやくせんたん
のみそきにて五寸のしやかをつくりこめ
くしきの御しやりを御しんにつくりこめ
なから方八寸のすいしやうのたうの中に
おさめむけほうしゆと名付け三國一の
てうほうりうわうのをしみ給ひしこと
はりところ聞えけれ

(67丁オ)